

吉田遺跡第 I 地区 D 区の調査

1 調査の概要

昭和46年4月に調査の行われた吉田遺跡第 I 地区 D 区は、吉田構内の中央部からやや北よりに位置し、現在では大学会館及び農学部の家畜飼料園として利用されている。地形的には、姫山の北から南にのびる支脈である通称「もり山」が、西に向かって舌状に張り出した洪積段丘の北斜面、19.0～24.0mの標高に立地している。

この洪積段丘および周辺において D 区調査以前には、昭和41年に A・B 区（本部前排水路¹⁾、昭和42年に C 区（本部1号館²⁾）の調査が行われている。A・B 区からは弥生時代中期後半の土壙や古代の遺物包含層、時期不詳の柱穴が、C 区からは土壙・柱穴などの遺構や、弥生時代後期終末の土器を多量に検出している。これらの調査により、この洪積段丘周辺は遺構分布密度の高い地域であることが判明し、吉田遺跡調査団は第 I 地区と呼称し重視した。また、D 区の調査以後にも、昭和46年 E 区（第 2 学生食堂³⁾）、昭和54年本部 2 号館⁴⁾、昭和58年大学会館などの調査が吉田遺跡調査団や埋蔵文化財資料館によって継続された。E 区からは古墳時代中期の方形竪穴住居跡が 6 棟、古代の溝が 1 条、時期不詳の柱穴が多数検出されている。本部 2 号館からは弥生時代後期終末の土壙、近世初期の屋敷跡などが検出されている。大学会館からは古墳時代中期の土壙や時期不詳の柱穴、弥生土器・土師器・須恵器の他に緑釉陶器・青磁・白磁・石銚帯・硯・木簡などの特殊な遺物が検出されている。

これらの調査により、弥生時代～近世に及ぶ第 I 地区の遺構分布密度の高さが明らかとなっている。特に、大学会館から出土した木簡や石銚帯などの、官衙的遺物⁶⁾は本地区の重要性を示すものといえる。そして、D 区はこの大学会館調査区と重なりながら、標高の低い実験水田側へと広がっている。

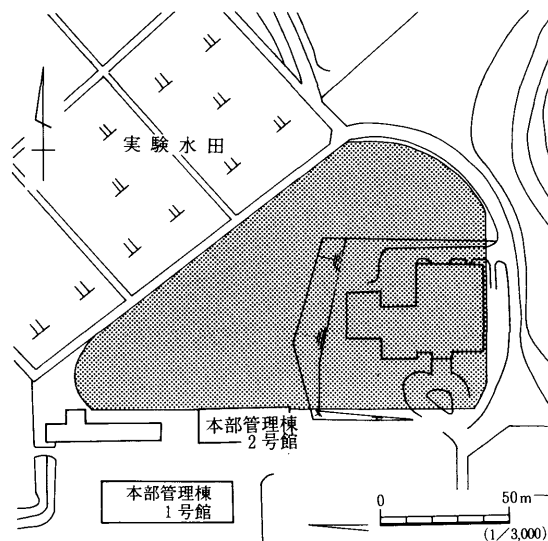


Fig. 49 調査区位置図

D区調査の経緯は吉田遺跡調査団発行の『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』によれば、「この地区に仮設の排水溝が長く掘られ、飼料園にとうもろこしを播種するため耕耘した際、弥生式土器ら古式土師器の破片を含む包含層が、5ヶ所で掘り出されたことからこの地とその周辺部を調査した。」とされている。また、当時の調査日誌によれば、「今回は、農学部が仮設農道以北を牧草地にするため、農道以北に重点を置き、農道以南については、後に詳しく調査する。」と記述されている。これらの記録から、本地区を家畜飼料園とする計画の具体化に伴い、耕作による地下への影響が予想されたため、吉田遺跡調査団は試掘調査を行ない、埋蔵文化財分布の把握を行ったことが読み取れる。

現在、埋蔵文化財資料館にはD区に関連した調査日誌が1冊と、図面が28葉残されている。28葉の図面のうち、15葉が原図であり13葉がその縮尺図である。また、36枚撮りフィルムのネガが、カラー1本、白黒2本の計3本保存されている。当時の調査を記録するものは、これらが全てである。過去に幾枚かの図面が散逸してしまい、遺構平面など内容を明らかにしえない部分がある。図面を欠くものについては、調査日誌や当時の写真によって推測し、文章及び図版での報告を行うことにする。

D区における調査は調査日誌によれば、まず発掘調査に先行してボーリングによる予察調査が行われ、7ヶ所の遺物包含層分布地点を確認している。この7ヶ所の遺物包含層分布地点に対して、トレンチが設定されている（Fig.50）。各トレンチの主軸は仮設農道に平行しており、農道にあわせてその設定が行われたと考えられる。各トレンチは洪積段丘の北斜面、標高19.0～24.0mの範囲に配置されている。D区のうち最も低い標高19.0～20.0mの部分では、3ヶ所で調査が行われている。南から北へ、第1地点、第2地点、第5地点の順である。次に、標高21.0～22.0mの部分では仮設農道を挟んで南に第3地点、北に第6地点の2ヶ所が設定されている。最も高い標高23.0mの部分には、仮設農道の部分に第4地点、その北側に平行して第7地点の2ヶ所が設定されている。これら7ヶ所の調査は、当初から厳密な計画が立てられていたわけではなかったらしく、調査日誌によればそれぞれのトレンチでの埋蔵文化財の遺存状況によって、調査の中断や拡張が行われている。このためか、いずれのトレンチも複雑な形状をしている。調査は、昭和46年4月12日から4月25日までの14日間、山口大学吉田遺跡調査団が山口県教育委員会社会教育課と山口大学文化会考古学部員の協力を得て実施した。なお、今回の報告に使用した発掘調査の図面類は、すべて山口大学吉田遺跡調査団が当時記録したものであるが、掲載にあたっては埋蔵文化財資料館が新たにトレースしたものを使用した。

調査の概要

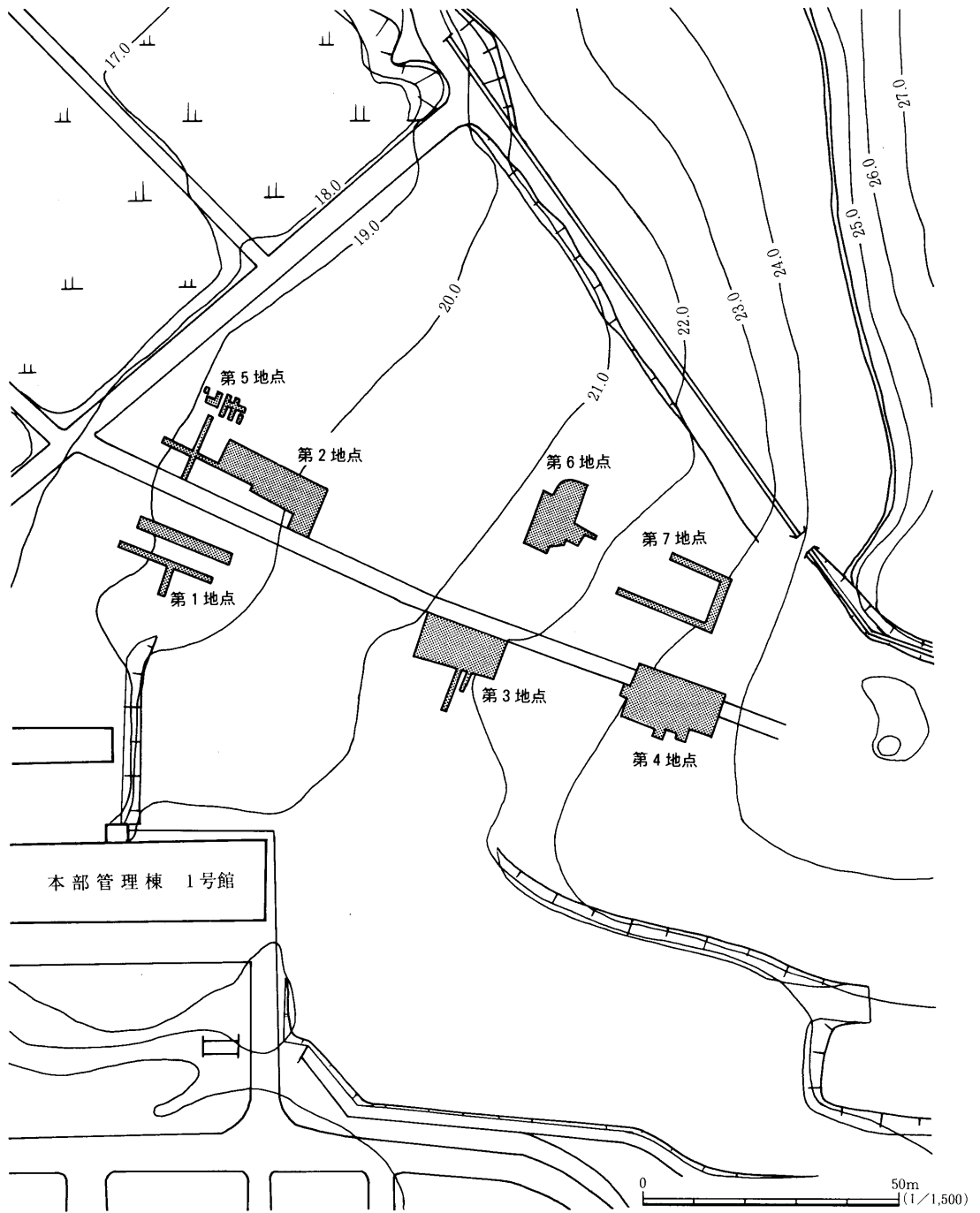


Fig. 50 トレンチ設定図

2 第1地点

第1地点はD区に設定されたトレンチのうち、第2・5地点とともに最も西側に位置し、標高も最も低いトレンチである。第2地点とは東南から西北にむかって走る仮設農道を挟んで向かい合っている。第1地点の調査に至る経緯は、吉田遺跡調査団が当時に刊行したガリ版刷りの『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』⁷⁾によれば、「仮設の農道の側溝として掘られた排水溝に、8～10mの長さに遺物包含層が露出していたので、はじめは竪穴住居址ではないかと考え付近一帯をボーリングしたところ、ほぼ南北方向に走る巨大な溝状の掘り込みであることがわかった。そこで、遺構の形態と構造や文化期をとらえる目的で、所要のトレンチを設けて発掘した。」とされる。埋蔵文化財資料館が保管する第1地点の図面類は平面図を欠き、土層断面図及びその縮図のみが残存している。

第1地点の調査区規模に関する記述は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』では認められない。しかし、資料館に残された第Ⅰ地区D区トレンチ設定図 (Fig.50) によれば、等高線に直交して東南－西北に長軸をもつ長さ約20.0mのトレンチが平行して2本設定されている。幅2.0mの北側トレンチに対して、南側トレンチは幅が1.0mと狭い。南側トレンチはさらにトレンチを垂直に2分するかのよう、拡張区が5.0mほど南に張りだしている。発掘調査日記によれば第1地点の調査は4月12日に始まり、4月15日までは掘削作業が終了していたものと考えられる（4月15日の日記が未記入のため明らかにしえないが、16日以降の第1地点に関する掘削の記載が見られないことより判断した）。土層断面図は、4月23・24日に作成されている。

第1地点における作業内容の詳細が日記に記録されている。これによれば、掘削が開始された4月12日には溝状の落込みが確認され、第Ⅰ地区C区（本部）で検出された溝状遺構との関連が想定されている。4月13日には溝状遺構の下部に泥炭層が分布していることが判明している。また、第1地点の溝状遺構の延長を探す目的で、第5地点の掘削が行われている。4月14日には溝状遺構の下部で確認された泥炭層を調べるために、2ヶ所でツボ掘りが行われている。第1地点の溝状遺構は第Ⅰ地区C区（本部）で検出されたものとの関連が当初想定されていたが、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば「耕耘された土壌や旧水田土層の下位に、東西の上幅約17m、下幅13.5m、深さ1mから1.3m以上の幅の広い溝状遺構で、南部にいくにつれて浅くなり、昭和43年に発掘調査した本部敷地の調査の際に掘りだした溝状遺構と異なるものであることがわかった。」とされる。地点的に平成5年度本部裏給水管埋設に伴う発掘調査⁸⁾で検出した、近世大溝に対応するものと想定できる。

第1地点

北壁
W(-5.136m)

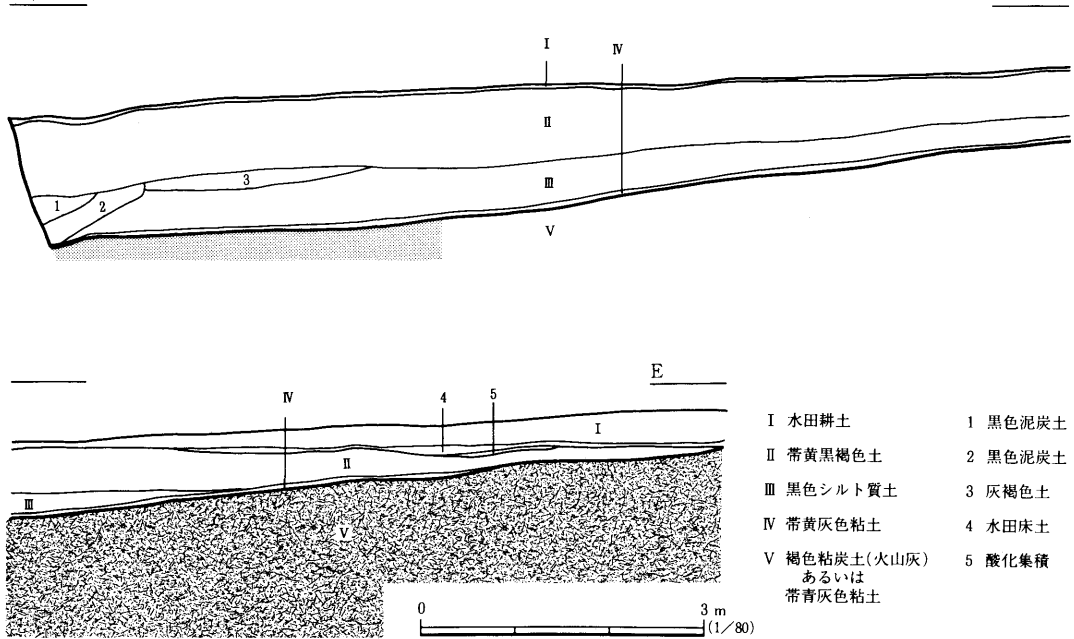


Fig. 51 第1地点土層断面図

第1地点は、次のような基本層序である (Fig.51)。

第I層：水田耕土、厚さ5～30cm

第II層：帯黄黒褐色土（土師器～中世土器片を含む）、厚さ5～80cm

第III層：黒色シルト質土（泥炭層、摩滅した弥生土器片を含む）、厚さ15～40cm

第IV層：帯黄灰色粘土、厚さ約3cm

第V層：褐色粘炭土（火山灰層）あるいは帯青灰色粘土（地山）

第I層は耕土層であるが薄く、直下が遺物包含層である。図面中には「土器は最下層にまで包含している」との記載が見られ、第II層から第IV層まで遺物包含層であったと考えられる。東から西にむかって地表の標高が下がっているが、それ以上に地山が下がっており、遺物包含層である第II・III層が厚みを増している。なお、第V層地山に関して図面上に褐色粘炭土と帯青灰色粘土の境は示されていない。現在の知見からすれば褐色粘炭土は鳥栖ロームであり、帯青灰色粘土は八女粘土であると考えられる。とすれば、帯青灰色粘土は褐色粘炭土よりも下位の堆積層であり、帯青灰色粘土の露出は褐色粘炭土が侵食されたことによるものであろう。

第1 地点出土遺物 (Fig.52-1~19, PL.25)

1は複合口縁壺の口縁部片である。頸部以下及び口縁端部を欠失し、残存する口頸部も全体の1/3程度である。口頸部の形態は頸部がゆるやかに外反し、その端部において強く「く」の字に屈曲して口縁部へと立ち上がっている。口頸部の屈曲部分は、断面において接合痕が認められる。内外面の風化が激しく、調整を観察することは出来ない。弥生時代後期の土器と考えられる。2は高坏の脚裾部片である。底径を復元してはいるが、小片のためその数値には誤差が含まれる。脚端部はヨコナデによって、つまみ上げられる。内外面の風化が激しく、調整を観察することは出来ない。弥生土器と考えられるが、古墳時代中期の土師器である可能性もある。3・4・5は底部片である。いずれも風化が激しく、調整を観察することは出来ない。また、いずれも底面が小さく、器壁が厚いことから、弥生時代後期後半の土器と考えられる。

6は土師器高坏の口縁部片である。坏部の屈曲部以下を欠失し、残存する口縁部も全体の1/5程度である。口縁部の形態はやや内弯気味に立ち上がり、端部がヨコナデによって外方へ屈曲している。内外面の風化が激しく、調整を観察することはできない。古墳時代中期の土器と考えられる。7は土師器高坏の脚部である。脚部は坏部との基部よりゆるやかにひろがり、裾部は強く屈曲して外方に長く伸びる。脚端部はヨコナデによって面をもつ。内外面の風化が激しいが、内面には時計と逆回転のケズリ痕を残している。なお、脚部の中央には、焼成後に外面から施された穿孔をもつ。孔径は6.5mmである。古墳時代中期の土器と考えられる。8は須恵器の坏身である。立ち上がり及び、胴部下半を欠く。立ち上がりの根元部分は残存しており直立気味であることや、比較的しっかりとした作りから、その所属時期は6世紀前半と考えられる。

9・10は鍋の口縁部である。胴部を欠くため、足付きであったかは定かではない。9の口縁部外面は、ヨコナデによってかすかにくぼんでいる。口縁端部は上方に、やや立ち上がり気味である。その口縁部の特徴から、岩崎編年のⅢ型式⁹⁾と考えられる。10の口縁端部はヨコナデによってつまみ出されるが、折り返すまでには到らない。その口縁部の特徴から岩崎編年のⅣ型式と考えられる。11はいわゆる羽釜の口縁部片である。口縁端部はヨコナデによって幅広い面をもつ。口縁端部よりわずかに下がった位置に、水平な鏝を張り付けける。内面にはハケ調整を残す。12・13は足鍋の脚部である。14・15は高台をもつ土師器碗の底部である。いずれも高台の突出は低い。16~18は高台をもたない土師器碗の底部である。19は土錘である。

第1地点

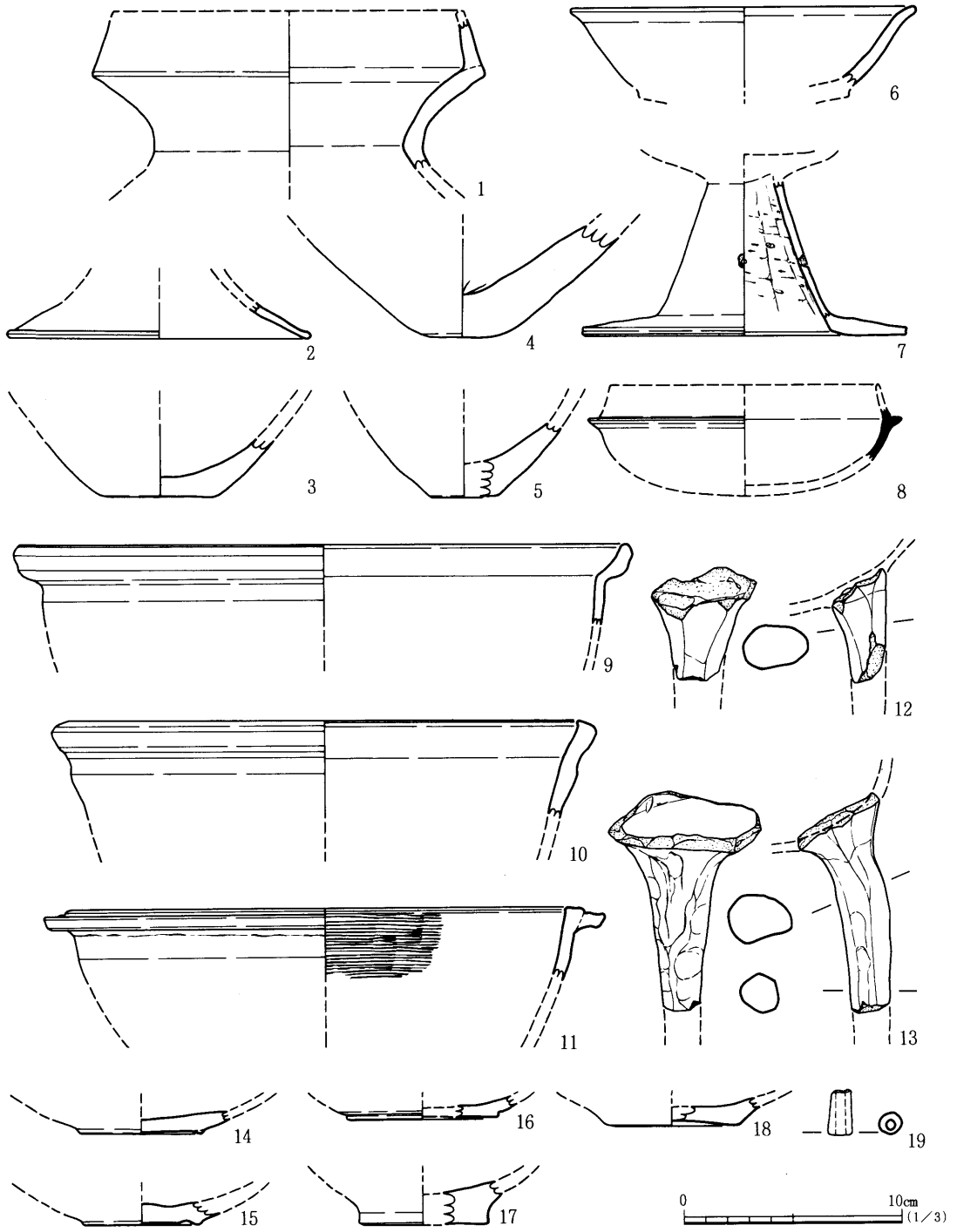


Fig. 52 第1地点出土遺物実測図

3 第2地点

第2地点は仮設農道を挟んで第1地点と向かい合い、北側には第5地点が近接している。標高19.0~20.0mに位置しD区では第1・5地点とともに、最も標高の低いトレンチである。第2地点の調査に至る経緯は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「第1地点から仮設農道を挟んだ北東側の飼料園で、耕耘された土壌が黒褐色をした遺物包含層であったので、総めぐりして調べた。」とされている。埋蔵文化財資料館が保管する第Ⅰ地区D区の図面類は、第2地点の平面図も土層断面図も欠いている。この点については後述するが、当初より実測作業が行われていなかった可能性がある。第2地点トレンチの位置や形については、第Ⅰ地区D区のトレンチ設定図から知ることが出来る。

第2地点の調査区規模に関する記述は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』には認められない。第Ⅰ地区D区トレンチ設定図 (Fig.50) によれば第2地点トレンチの形態はやや複雑である。仮設農道に平行した長さ24.0m、幅7.0mの長方形を基本形としているが、南側辺の東端部が幅5.0mほど仮設農道にむかって突出し、西側辺の南端部には十字形のトレンチが取り付いている。このようなトレンチの形態が、いかなる目的で設定されたのかは不明である。おそらく、遺物の包含状況の確認を目的としたトレンチの拡張が行われたため、不定形な形態になったものと考えられる。

発掘日誌によれば第2地点の調査は4月12日に始まっているが、すでに4月13日の日誌には「P.D.2は、破壊されている可能性が非常に濃い」と記述されている。また、4月13日の日誌に明日の予定が記述されており、そこには「P.D.2 溝状遺構に至るまでの表土はぎ」とある。しかし、4月14日以降の日誌には、第2地点に対する記述が全く認められない。このことから、第2地点の調査が4月14日以降行われていなかったと想定することも可能である。また、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「(前略) 削剥が著しいため明瞭な遺構の形態はとらえられず、若干の小起伏面や、小石の配石を見いだしたにすぎなかった。」とされる。おそらく、表土除去作業中に攪乱の激しいことが判明し、本地区の調査はその時点で切り上げられ、他地区に調査の主力が置かれたものと考えられる。削平により遺物包含層も遺構も検出されなかったため、第2地点の土層断面図も遺構平面図も作成されなかったであろう。第2地点出土遺物には、粗陶器片や砥石など近世あるいは近代のものと考えられる遺物がある。『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』に記述された「小石の配石」も含めて考えるならば、近世の屋敷地があり、周辺を整地によって削平している可能性が強い。

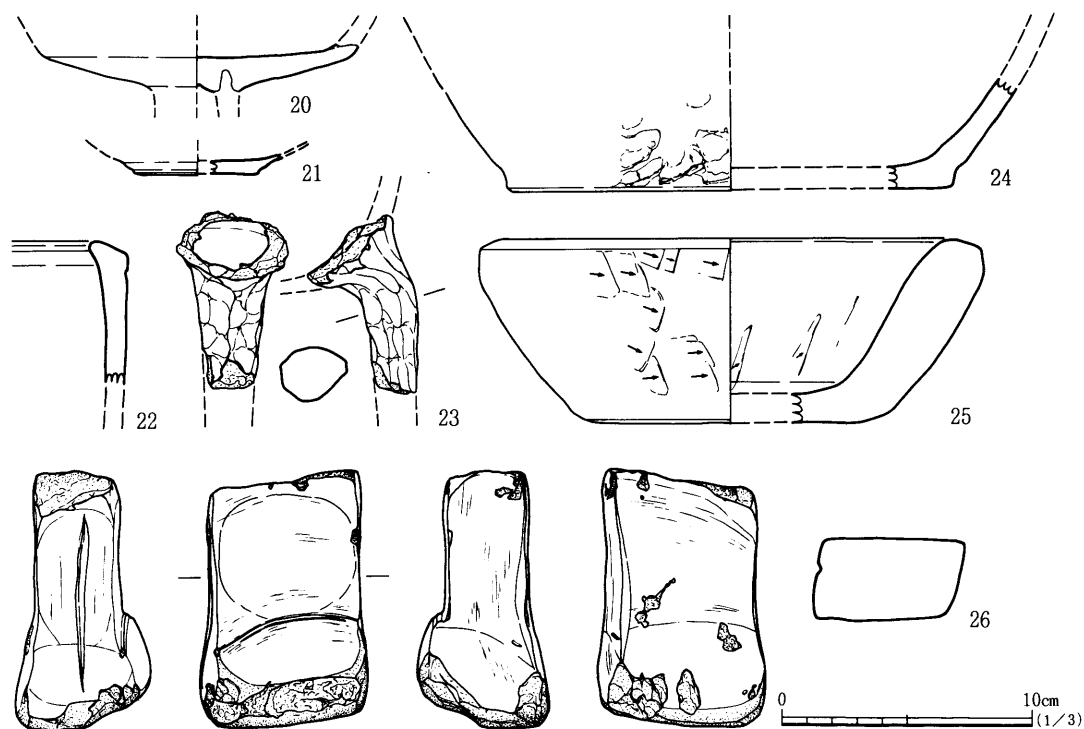


Fig. 53 第2地点出土遺物実測図

第2地点出土遺物 (Fig53-20~26, PL.26)

20は高坏の坏部である。口縁部と脚部を欠失する。脚部との接合痕を明瞭に残す。内外面の風化が激しく、調整を観察することが出来ない。古墳時代中期の土器と考えられる。21は土師器皿の底部である。風化が激しいが、底面には糸切り痕を残す。22は土師質の粗陶器で、器形は口縁部に最大径をもつ甕と考えられる。口縁部を内側に突出させ、上端に幅広い面をもつ。口縁部外端からやや下った部分に、接合痕による一条の沈線を残す。内面には成形時のタタキ工具痕とそれを消したハケ工具痕が一部残る。近世あるいは近代のものと考えられる。23は瓦質土器の足鍋の脚部である。脚部外面には成形時の指頭圧痕を残す。24は土師質の粗陶器で、甕の底部と考えられる。底部側面には指頭圧痕を多数残している。22の口縁部と同じく、近世あるいは近代のものと考えられる。

25は滑石製の石鍋である。底部から胴部が斜めに立ち上がり、そのまま口縁部となる。鏝はもたない。口縁端部は肉厚である。ノミ痕をかすかに残すが製品であるらしく、外面には吹きこぼれの痕跡がある。26は石英斑岩製の砥石である。4面を使用する。実測図における正面には、鎌の曲刃部分を研ぐことによって生じた、半円形の高まりを残している。また、左側面には何等かの刃部を研ぐことによって生じた、長さ約7.0cm、幅4mm、深さ2mm弱のV字形をした溝がある。

4 第3地点

第3地点は標高21.0～22.0mのD区中央に位置し、仮設農道の南側に接しており、第6地点とは仮設農道を挟んで向かい合っている。第3地点の調査に至る経緯は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「第1地点の東方約42mの地点で、仮設農道の掘取面に竪穴住居址か円形土壙とみられる遺構の一部が露出していたので、付近を総めぐりして調査した（後略）」とされる。仮設農道の側溝が遺物包含層を露出させたと考えられる。埋蔵文化財資料館が保管する第3地点の図面類は、平面図1葉に南壁断面図1葉、東壁断面図1葉、土壙断面図が1葉の計4葉である。

第3地点の調査区は平面図によれば仮設農道に平行しており、南長辺約15.2m、北長辺約14.4m、東短辺約7.2m、西短辺約8.4mのいびつな長方形を呈している。また、土層確認のための幅50cmのトレンチが調査区の南側に2本延長されている。発掘調査日誌によれば、4月13日から調査が開始されている。発掘日誌には「今回調査しない予定であったが、調査することにし、とりあえず、トレンチを2本入れる。」との記述がなされている。さらに4月14日の記述には「P.D3・4にて表土を取り除いた結果住居址らしきものが見つかり、以後こちらに重点をおいて調査する。」とある。これらの記述の背景には、D区の低地部である第1・2・3地点の調査成果がおもわしくなかったため、調査の重点が他所に切り替えられたことを示していると考えられる。この後、竪穴住居跡状遺構の検出や図取りが行われ4月24日に調査が終了している。

第3地点で検出された主な遺構（Fig.54）として、竪穴住居跡状遺構・土壙・柱穴などがある。竪穴住居跡状遺構は、発掘日誌には「方形住居址の可能性大」、「方形住居址らしいが、ピットとの関連不明」と記述されている。『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』においては、「柱穴群と深い竪穴住居址や土壙を検出することができたが、これまた、複雑に遺構が重複し、損壊が著しいので、それらの元の形状をとらえることが困難であった。」と記述され、検出状態が良好でなかったと考えられる。このことは平面図にも反映されており、竪穴住居跡としての明確な図示はなされていない。図面中には東側と西側に対応するかのように、落込みの角張ったコーナーが表現されている。これを方形竪穴住居跡の2隅と考えるならば、1辺が9.0mにも達する大型建物となる。山口県下で検出される一般的な方形竪穴住居跡は1辺が4.0m前後であり、2つのコーナーを1棟のものとするのには無理がある。2つのコーナーを竪穴住居跡に伴うものとするならば、2棟の竪穴住居跡が切り合ったと考えるべきである。しかし、その可能性も薄いものと考えられる。

第3地点

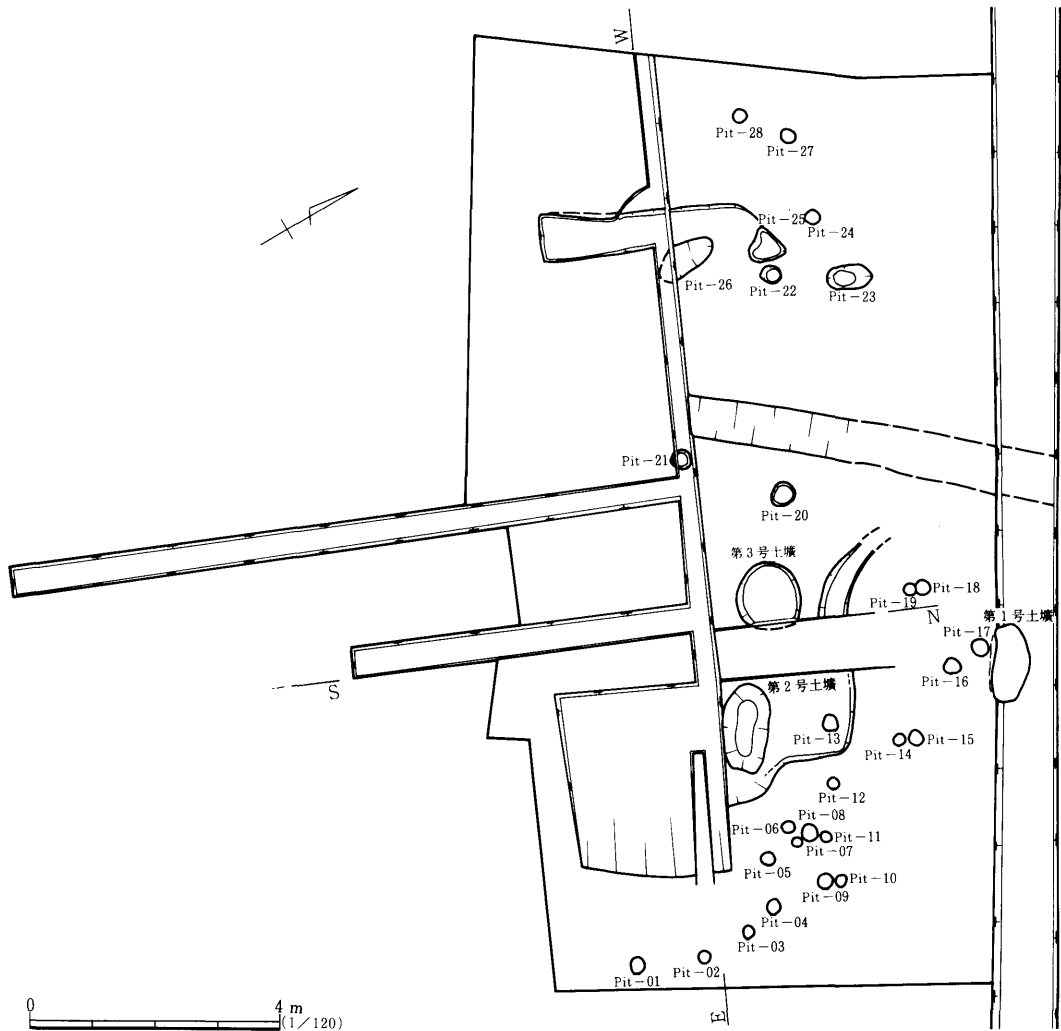


Fig. 54 第3地点遺構配置図

土壙は3基検出されている。1基は第3地点を調査するきっかけとなった、仮設農道の側溝に切られた第1号土壙で、平面は楕円形を呈している。断面は袋状で、深さは検出面より約0.6mを計り、内部は黒色土で充填される。第2号土壙は東側の竪穴住居跡状遺構と切り合っており、平面は楕円形を呈する。第3号土壙もまた、竪穴住居跡状遺構と切り合い、平面は円形を呈する。いずれの土壙も、出土遺物はなかったようである。柱穴に関しては『山口大学構内第I地区D区発掘調査概報』に「なお柱穴には、直径20cm、深さ30cm内外を測る太くて深いものと、径10cm内外、深さも10cm内外の浅くて小さいものとの2群が重複しており、浅い方には古式土師器が埋まっていた。」と記述される。

吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査

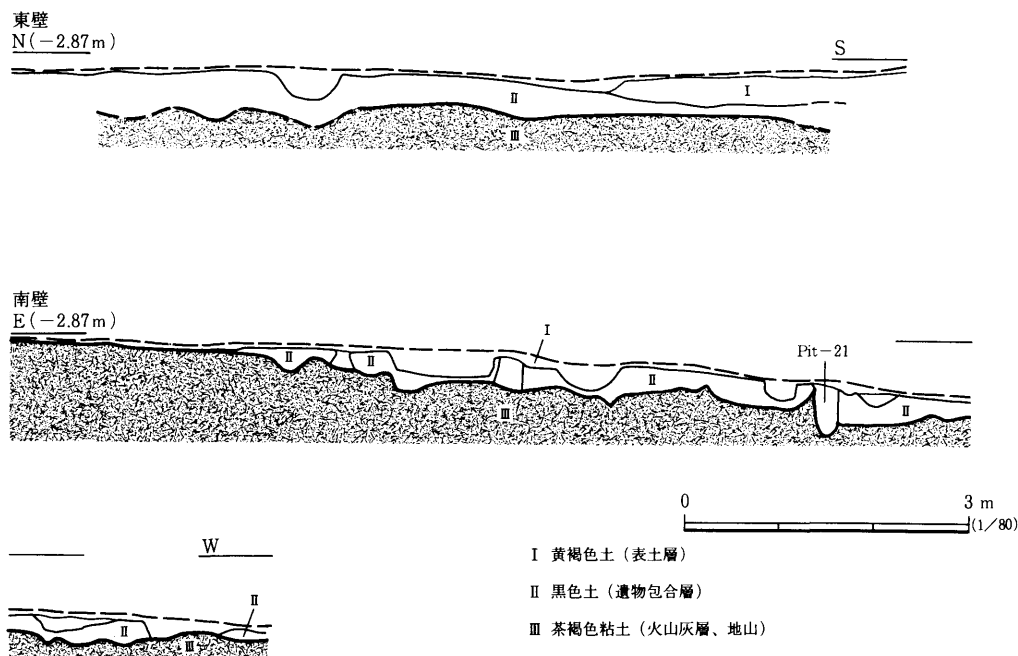


Fig. 55 第3地点土層断面図

第3地点は、次のような基本層序である (Fig.55)。

第Ⅰ層：黄褐色土（表土層）、部分的に残存

第Ⅱ層：黒色土（遺物包含層）、厚さ10～30cm

第Ⅲ層：茶褐色粘土（火山灰層、地山）

第3地点の土層断面図において地表面は破線で表現され、実線での表現は包含層の上面からである。土層断面図の注記には、「表土を5cm内外掘り取る」と記述されている。調査日誌にも、トレンチ設定が表土の除去後に行われていたことを示す記述がある。ただし、除去された表土層は、厚さ5cm前後できわめて薄いものであったと思われる。第Ⅱ層の黒色土は遺物包含層であるが、標高の高い東側では削平されて残存しない。これに対して、標高の低い西側には約30cmほど遺物包含層の堆積が残存している。Pit-21が南壁土層断面図に表現されているが、第Ⅱ層を切っており遺物包含層形成以後に掘り込まれたものである。近世以降の柱穴であろう。

第Ⅱ層の遺物包含層直下は、火山灰層の地山である。火山灰層は茶褐色粘土と注記されており、現在の鳥栖ロームを指すものである。なお、ボーリング調査を行っており、この第Ⅲ層茶褐色粘土は約40cm下位より「黄味を帯びる」ことが判明している。この「黄味を帯びる」とは、鳥栖ロームの下位に八女粘土が堆積していることを示すものであろう。

第3地点

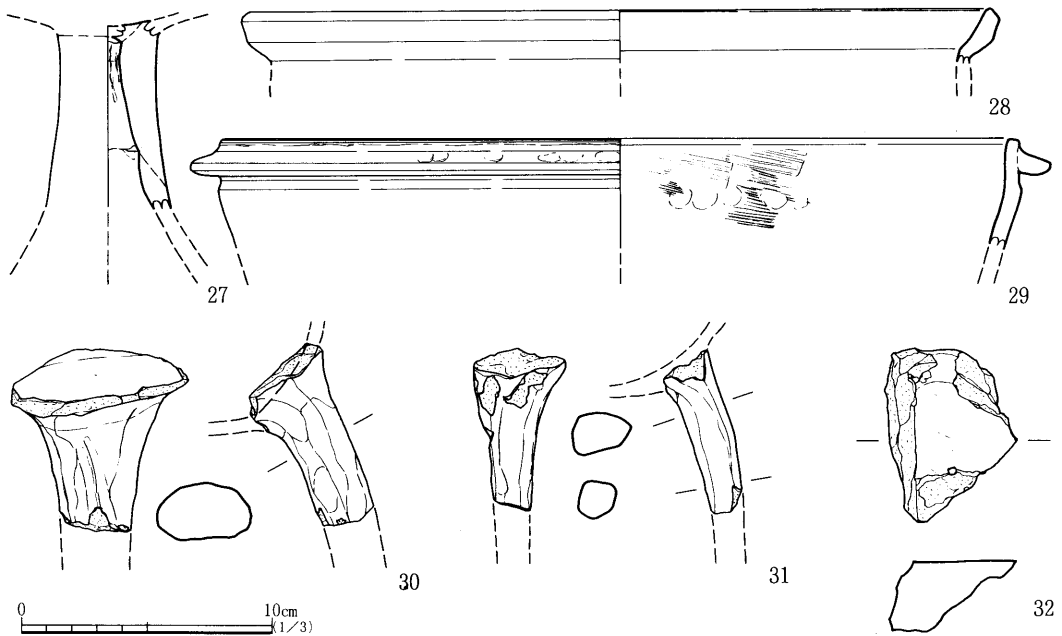


Fig. 56 第3地点出土遺物実測図

第3地点出土遺物 (Fig56-27~32, PL.27(1))

27は高坏の脚部である。坏部に近い基部は柱状を呈するが、裾部を欠くため全体の形態は明らかではない。風化が激しく、調整を観察することが出来ない。基部内面にはシボリ痕を残す。弥生時代中期後半の土器と考えられる。28は鍋の口縁部である。胴部を欠くため、足付きであったかは定かではない。口縁部外面は、ヨコナデによってかすかくぼんでいる。口縁端部は上方に、やや立ち上がり気味である。その口縁部の特徴から、岩崎編年のⅢ型式と考えられる。口径を復元してはいるが、小片のためその数値には誤差が含まれる。29はいわゆる羽釜である。口縁端部より下がった位置に、水平な鐔を張り付ける。鐔張り付けのために強いヨコナデが施され、鐔下端に接した胴部が凹線状にくぼむ。鐔の上側は全体的にナデつけられているが、下側にはナデが及ばない部分があり接合痕を明瞭に残している。内面には、左上がりのハケ調整を残す。外面は二次焼成により赤褐色を呈する。30・31は足鍋の脚部である。30は風化により色調は黄灰色を呈するが、外面には多数の指頭圧痕を残している。31は風化が激しく、器面が摩滅する。色調は二次焼成により、淡赤色を呈している。

32は凝灰岩製の砥石である。使用面の1面と自然面の1面を部分的に残すのみで、他の部分は欠失する。

5 第4地点

第4地点の調査に至る経緯は、概報や日誌には記録されていない。しかし、第Ⅰ地区D区全形図によれば、調査区は仮設農道と重なっており、第3地点と同じく仮設農道の設置に伴って遺物包含層が露出したために、調査が行われたものと考えられる。埋蔵文化財資料館が保管する第4地点の図面類は、平面図1葉に東西トレンチ断面図1葉、南北トレンチ断面図1葉、第1号土壙図1葉、の計4葉である。

第4地点の調査区は仮設農道を挟み込む形で、農道の南側と北側に設定されている。北側の調査区は東西に約17.0m、南北に約3.6mの長方形を呈する。南側の調査区は東短辺が約4.8m、西短辺が約6.5mと西に行くに従い開き、北辺が約19.0m、南辺は不定形な階段状を呈している。調査は、D区全体の調査が開始された4月12日から、全てが終了する4月25日まで継続して行われたようであり、調査の重点が置かれていたと推測される。その要因として、4月12日の表土をめくった段階で、溝状遺構と竪穴住居跡状遺構が確認されたことによるものと考えられる。

第4地点より検出された遺構（Fig.57）は、溝状遺構と竪穴住居跡状遺構、土壙、柱穴とされる。溝状遺構は『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「下位にある溝状遺構は、その上幅3.5m、下幅1.3m内外で深さは約10cmを測り、断面形は逆台形を呈して、南から北西方向に走り、第7地点を経て第6地点に連なるものと推考される。」と記述されている。しかし、平面図には溝状遺構の表現はなく、後述するが断面図には逆台形の落込みが表現されているが、概報の記述と数値が一致しない。また、第6地点及び第7地点で検出したとされる溝状遺構は、それぞれの頁において詳述するが、自然地形の落込みであることが確実である。これらに第4地点の溝状遺構が連なるものとするれば、同様な自然地形の落込みであろう。ただし、第6・7地点とは異なり土層断面図には、落込みの両肩のあがり表現されており、遺構の可能性も考えておく必要がある。

竪穴住居跡とされる直径が約15.2mの円形遺構も、溝状遺構と同様に誤認の可能性が高いものである。まず、吉田遺跡における弥生時代の竪穴住居跡で、直径が約15.2mを測るような超大型住居があったとは考え難い。さらには竪穴住居跡状遺構は溝状遺構が埋没した後に、その上面に掘削されたとするが、溝状遺構の出土遺物に瓦質土器が含まれる以上、竪穴住居跡の可能性はきわめて低いといえる。遺物を包含した、何等かの浅い落込みであったと考えられる。竪穴住居跡状遺構の南側では、直径約1.0m、深さ90cmの不整円形の土壙が1基検出されている。

第4地点

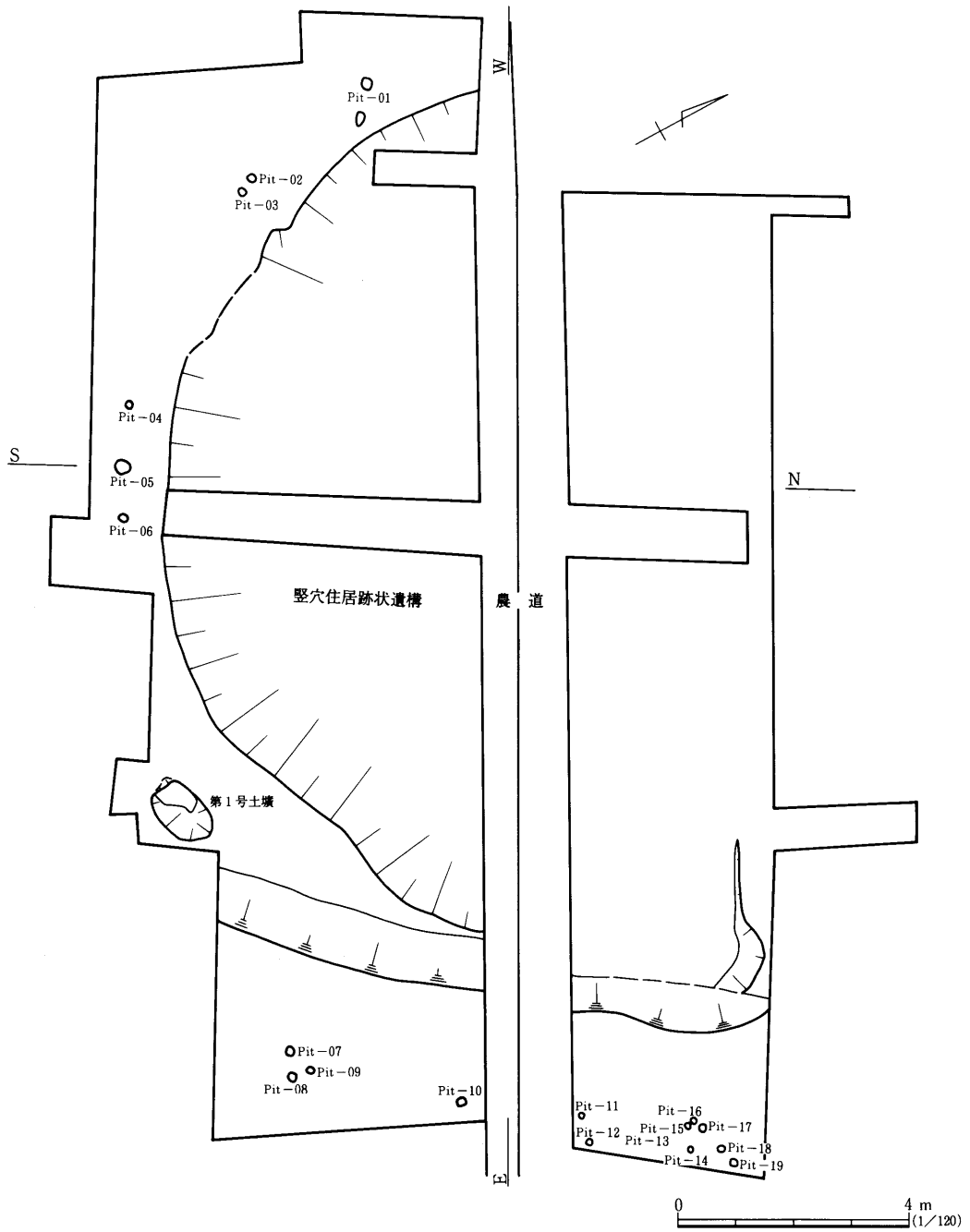


Fig. 57 第4地点遺構配置図

第4地点は、次のような基本層序である (Fig.58)。

第Ⅰ層：表土、厚さ8～35cm

第Ⅱ層：黒色土 (遺物包含層Ⅰ)、厚さ10～40cm

第Ⅲ層：黒褐色土 (遺物包含層Ⅱ)、厚さ10～25cm

第Ⅳ層：火山灰土 (地山)、厚さ約80cm

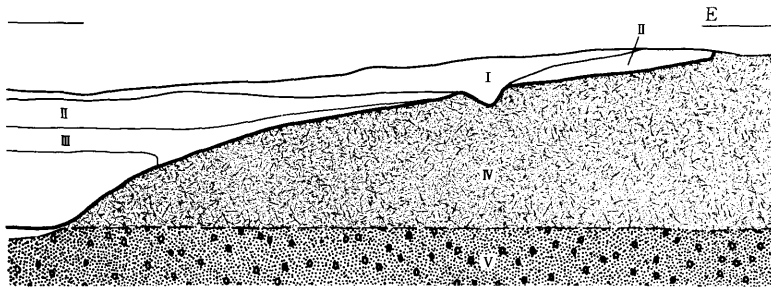
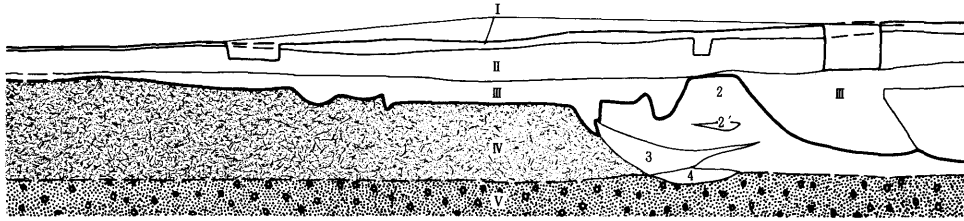
第Ⅴ層：砂礫を含む粘土

第Ⅰ層である表土層はきわめて薄い、東端から約2.4m付近の旧地形が大きくカットされて段状となっており、その部分の表土層の厚さは約35cmである。第Ⅱ層は平面図と対応させて考えるならば、堅穴住居跡状遺構の埋土ということになる。しかし、前述したように概報の記述にしたがえば、瓦質土器を含んだ中世の溝状遺構の上に、弥生時代の堅穴住居跡が建てられたことになる。それは層位的に不可能なため、第Ⅱ層は遺物包含層として考えておく。第Ⅲ層もまた遺物包含層である。第Ⅲ層の直下は地山の鳥栖ロームである。

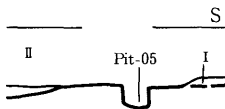
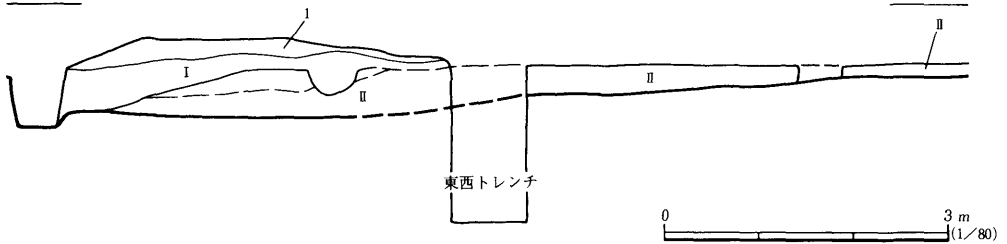
なお、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』に記述される溝状遺構であるが、南から北西方向に走る以上、東西軸に切った壁面に断面が現れるはずである。しかし、概報に記述されるような「上幅3.5m、下幅1.3m内外で深さは約10cm」の規模に該当する落込みは、土層断面図には認められない。東西トレンチの土層断面図 (Fig.58) には、鳥栖ローム層を遺構面として掘りこまれた断面が逆台形状を呈する落込みの表現があり、これが溝状遺構に該当する可能性が大きい。ただし、溝上面から底まで深さが約1.0mあり、概報の記述との間に大きな数値の開きがある。仮に、概報の数字に誤植があったと考えとしても、その幅にも概報と土層断面図との間には大きな開きがある。土層断面図に表現された逆台形状の落込みの上面幅は4.5mを超えており、西側の火山灰の再堆積層までも含めるなら6.0mとなる。概報の溝状遺構の記述には「褐色の粘土層や砂質粘土層が投げ込まれた状態で堆積していた」とあり、土層断面図の火山灰再堆積層を指すものかとも考えられる。しかし、仮に概報に記述された溝状遺構と断面図に表現された落込みが同一のものであるとしても、果してそれが人工の溝であったか自然地形の落込みであったか判断することは現在では不可能である。概報の記述にそのまま従えば、人為的な埋め立てが行われた人工的な溝ということになろう。しかし、先述したようにこの第4地点からわずかに北に下がった昭和58年度大学会館新営に伴う発掘調査では、北ないしは北西に開く自然地形の落込みを検出している。その落込みの上部が、第4地点で検出した溝状遺構にあたる可能性は極めて高いものと考えられる。

第4地点

東西トレンチ
W (-1.038m)



南北トレンチ
N (-1.178m)



- | | |
|---------------------|-----------|
| I 表土 | 1 攪乱土 |
| II 黒色土 (遺物包含層 I) | 2 火山灰の再堆積 |
| III 黒褐色土 (遺物包含層 II) | 2' 黒色粘土 |
| IV 火山灰土 | 3 黒色粘土 |
| V 砂礫を含む粘土 | 4 帯青灰黒色粘土 |

Fig. 58 第4地点土層断面図

第4 地点出土遺物 (Fig.59-33~55、60-56~70、61-71~73、PL.27(2)~30)

33・34は前期弥生土器の有文壺である。両者とも風化が激しく、器面の状態は不良である。33は鋸歯状圧痕のつかない貝殻により、羽状文が押圧施文される。文様帯の下端を区画する沈線は認められない。34は鋸歯状圧痕のつく貝殻により、羽状文と重弧文が押圧施文される。羽状文と重弧文の間には2条の押圧沈線が施される。

35~38は中期後半弥生土器の垂下口縁壺である。35は口縁部の破片と考えられ、内面に2条1組の隆帯が貼り付けられている。36・37は口縁垂下部の破片であるが、風化しており器面の状態は不良である。両者とも垂下部の外面には、山形文を構成する1単位と考えられる1条の斜線が施されている。38は頸部の破片である。頸部の屈曲部には2条1組の隆帯が貼り付けられている。隆帯間にはハケ工具によるおさえの痕跡が認められる。39は甕口縁部の破片である。口縁端部は面をもつ。弥生時代中期後半の土器と考えられる。40は甕口縁部の破片である。口縁部は面をもつ。弥生時代後期の土器と考えられる。41は甕口縁部の破片である。古墳時代中期の土器と考えられる。42は高坏の脚部である。中実で柱状の脚に、内弯気味に開く裾をもつ。裾端部は欠失するため、その形状は明らかではない。脚部先端の側縁には坏部の剥離痕を残す。風化が激しく、調整を観察することが出来ない。43は高坏の坏部である。口縁部と脚部を欠失する。風化が激しく、調整を観察することが出来ない。古墳時代中期の土器と考えられる。

44~47は弥生土器の底部である。44は前期弥生土器の壺底部である。外面は風化のため調整が不明瞭なものとなっているが、底部側面にはハケ工具痕がつく。内面はハケ調整の後、ミガキ調整が施されている。45・46は前期弥生土器、47は中期弥生土器の甕底部である。風化が激しく、調整を観察することは出来ない。

48は土師器碗の口縁部である。口縁端部は丸く収められ肉厚である。49~51は土師器碗の底部である。49は断面長方形の高台が高く突出する。50は断面カマボコ形の高台である。51は高台をもたない。内面にはロクロ成形による凹凸を残す。底面には糸切り痕と、それを切って板状圧痕が残されている。52・53は中世後半~近世の甕あるいは鉢の底部である。52は土師質の粗陶器である。外面における底部側面の凹凸は激しい。内面には目の細かいハケ調整が施される。53は瓦質土器である。外面における底部側面の凹凸は激しく、部分的にタテハケ調整の痕跡を残す。内面はナデ調整の後にミガキ調整を施している。54・55は足鍋の脚部である。54は脚基部の周囲に煤の付着が認められる。脚部の内側は2次焼成により淡赤褐色に変色する。55は風化が激しい。

第4地点

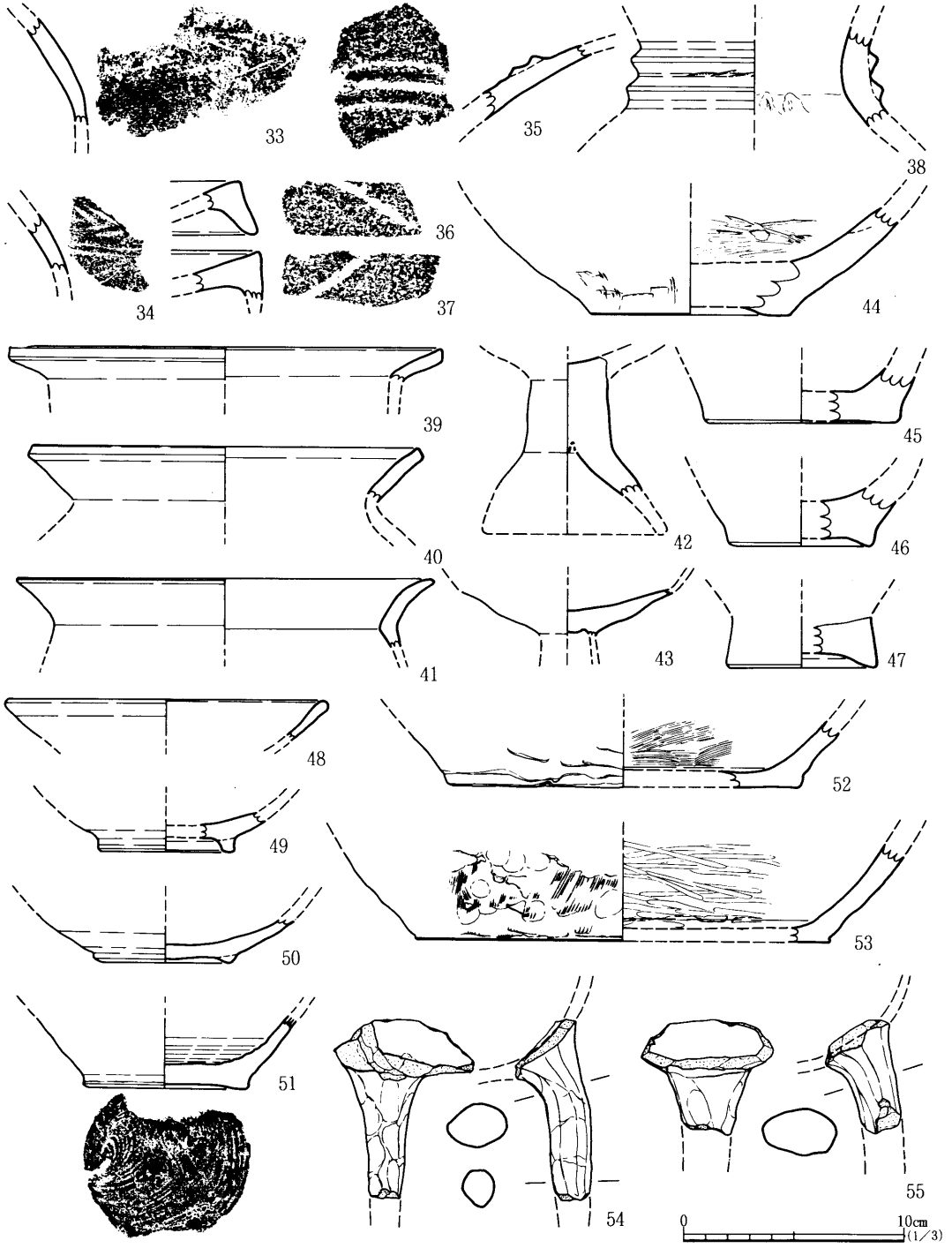


Fig. 59 第4地点出土遺物実測図(1)

吉田遺跡第I地区D区の調査

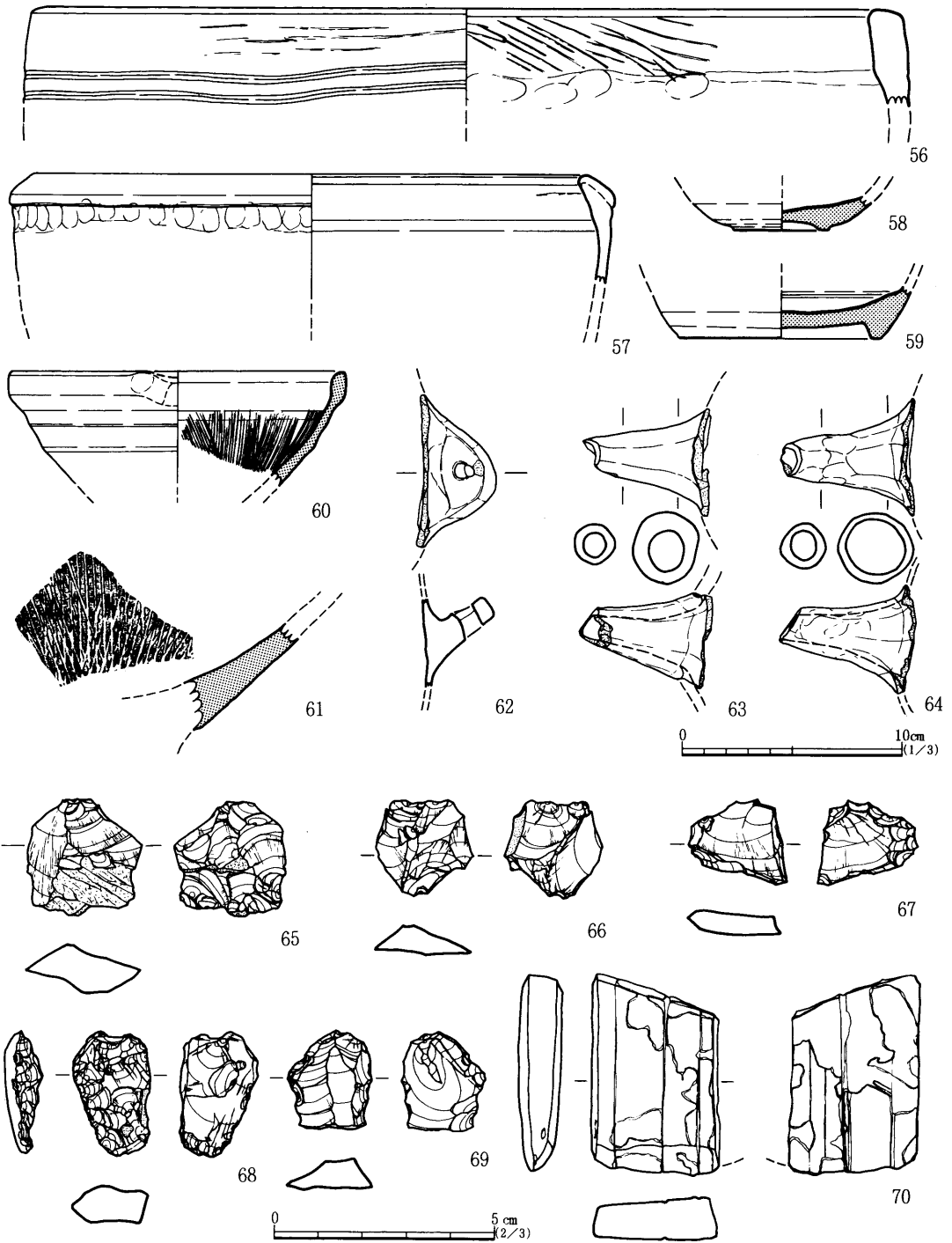


Fig. 60 第4地点出土遺物実測図(2)

第4地点

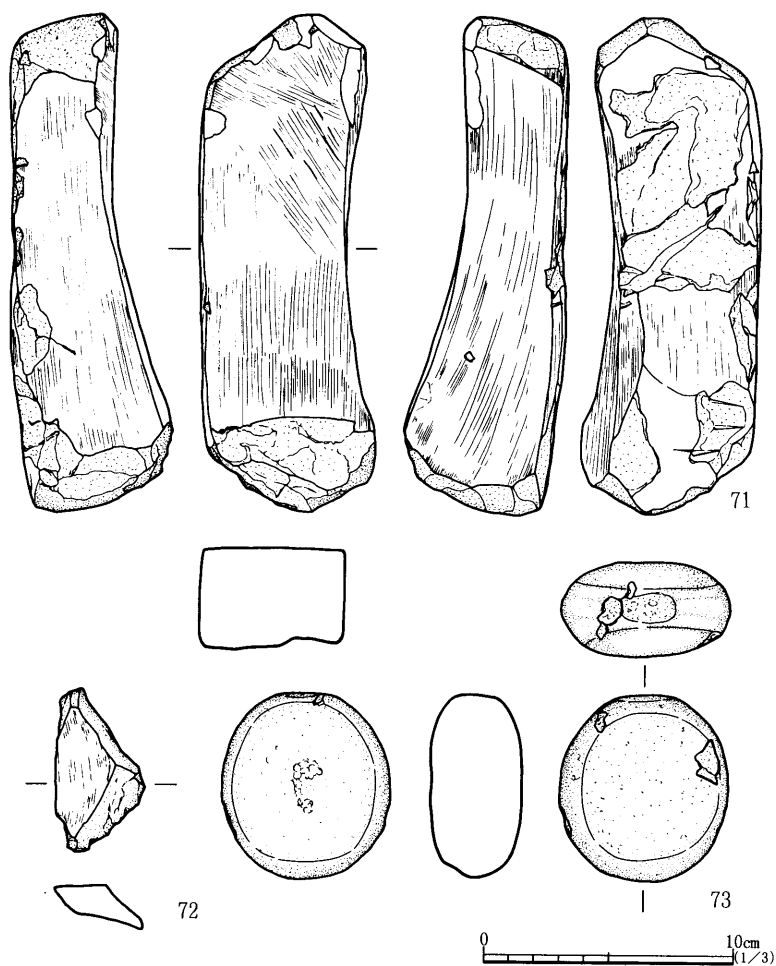


Fig. 61 第4地点出土遺物実測図(3)

56・57は土師質の粗陶器の甕である。56はかなり大型のもので、野壺などに使用されていたものと考えられる。57は口縁部成形のために貼りたした粘土紐の接合痕を外面に残す。58は陶器碗で高台部は露胎である。唐津製品である。59の陶器については器種が不明である。高台は削り出しによる。内面の全体に釉が施されている。60・61はすり鉢である。60は在地系のものと考えられ、内外面には鉄釉を施している。61は唐津製品である。62～64は土師質の粗陶器の土瓶である。62は把っ手、63・64は注口の破片である。注口の下半部には煤が付着している。

65～69は剥片である。65～67は姫島産黒曜石製、68は黒曜石製、69はチャート製である。70は扁平片刃石斧である。上半部及び右半部を欠損する。泥岩製。71・72は砥石である。ともに流紋岩製。73は敲き石である。周縁部の両端を使用している。

6 第5地点

第5地点は第2地点の北側に隣接し、第1・2地点と共にD区では最も低い標高19.0～20.0mに位置する。調査に至る経緯は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「耕耘された畑地一面が黒褐色を呈し、弥生式土器とみられる小破片が散布していたのでトレンチを設けて地下を探查した（後略）」とされる。埋蔵文化財資料館が保管する第5地点の記録類は平面図を欠き、土層断面図が2葉残されている。

第5地点調査区は第Ⅰ地区D区トレンチ設定図（Fig.50）によれば、東西方向や南北方向のトレンチの集合体であり、形状の説明は困難である。『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』の「時間の都合で全貌を明らかにすることができず、残余は次の調査に譲ることにした。」との記載に見られるように、以後の調査の重点は第3・4・6・7地点などの標高21.0m以上の地区に絞られる。発掘調査日誌によれば、第5地点の調査は4月13日から始まり4月17日には掘削が終了していたものと考えられる。土層断面図は、4月24・25日に作成されている。なお、調査終了日である25日の日誌には、「第5地点より、弥生時代の溝検出」と記述されている。土層断面図に基底面を記入するために、最終日に深掘りが行われたのであろう。

第5地点の土層（Fig.62）は、前述の調査に至る経緯が示すように、表土と遺物包含層が耕作によって攪乱されており、純粋な遺物包含層は残存していなかったようである。本地区の表土層及び遺物包含層は薄いものであったらしく、攪乱層の直下は火山灰層の地山となる。地山に関して土層断面図の東端から16.0m付近に「火山灰が白色になる」との注記があり、地形の傾斜に従い鳥栖ロームから八女粘土へと変化する状況が示されている。

第5地点の遺構は、削平が激しいためか、ほとんど検出されなかったようである。第5地点が平面図を欠くのは散逸したためではなく、図取りが行えるような遺構が検出されなかったために、当初より平面図が作成されなかった可能性もある。ただ、先述したように最終日には弥生時代の溝が最も低い調査区の西端で検出されており、概報には「北西方向に走る上幅約1m、下幅約50cm、深さ約40cmの溝状の掘り込みの中から、完形に近い弥生中期の壺形土器1個を検出した。」との記述がある。土層断面図には、この溝の断面が示されており、それによれば西肩はゆるい傾斜をもって溝底となるが、東肩は途中で平坦面をもつ2段掘りを呈している。なお、概報に記述された溝からの出土土器であるが、それを示した注記をもつ土器がなく、現在ではどれを指しているのか不明である。ただし、当時の出土状況写真 PL.23(3)が埋蔵文化財資料館に残されており、その写真から形態を判断する限り出土地点不明の Fig.71-108の土器である可能性が高い。

第5地点

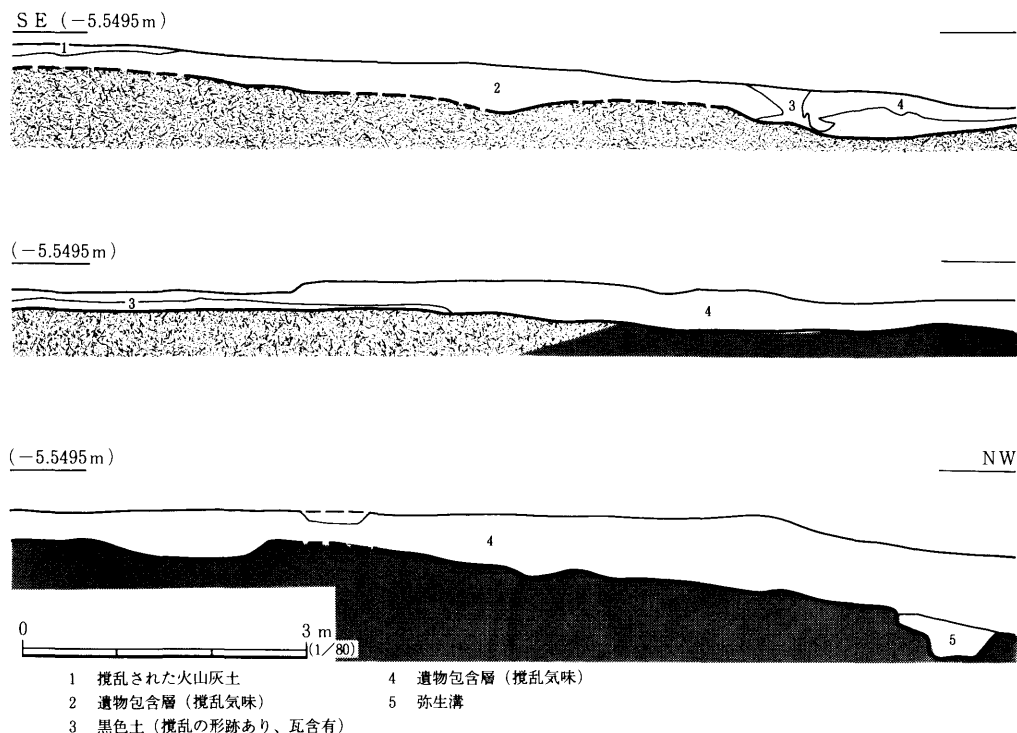


Fig. 62 第5地点土層断面図

第5地点出土遺物 (Fig.63, PL.31(1))

74は頸部にヘラによる連続刺突文を施す甕である。その特徴から弥生時代後期前半の土器と考えられる。75は土師器碗の底部である。華奢な高台が高く突出する。胎土は精製粘土を使用する。76は土師器皿である。風化が激しく、摩滅する。胎土は精製粘土を使用する。77は足鍋の脚部である。鍋胴体との接合部分で剥離しており、脚基部にその痕跡を残す。脚部の内側は二次焼成により赤褐色を呈する。

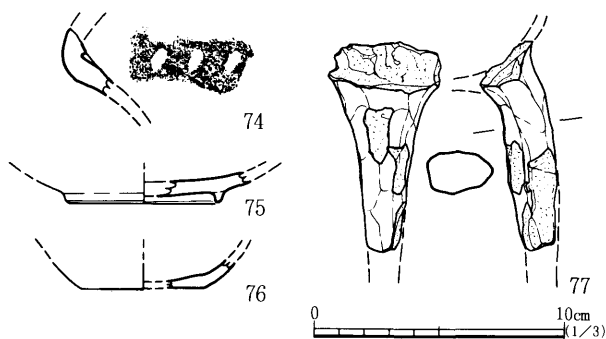


Fig. 63 第5地点出土遺物実測図

7 第6地点

第6地点は標高21.0~22.0mの第Ⅰ地区D区では中央に位置し、同じ標高にある第3地点とは仮設農道を挟んで向かい合っている。調査に至る経緯は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』によれば、「耕耘された畑地に遺物が散布し、包含層が露出していたので発掘調査を行った。」とされる。埋蔵文化財資料館が保管する第6地点の図面類は、平面図1葉と東西トレンチ断面図1葉の計2葉である。なお、第6地点の上には現在、大学会館が建築されており、昭和58年度の新営の時には埋蔵文化財資料館によって再発掘されている。再発掘は吉田調査団による第6地点発掘資料の検証を可能にしている。このことは、第Ⅰ地区D区の吉田調査団発掘資料が断片的であるだけに、重要なことである。

第6地点の調査区は平面図（Fig.64）によれば、不定形な形をしている。長辺約14.0m、短辺約7.6mで北東方向に長辺の軸を合わせた長方形が基本形であるが、南隅と北隅はL字状にくぼんでいる。東南側の長辺には、南寄りに長辺約3.6m、短辺約3.2mの方形の突出部が取り付いている。また、西隅と東隅を結ぶ対角線に沿って、土層観察用の深掘りトレンチが設定されている。発掘調査日誌によれば第6地点の調査は4月12日から始まり、4月21日頃には全ての作業が終了していたものと考えられる。

第6地点からは住居跡と溝状遺構が検出されたと概報には記述されるが、昭和58年度の再発掘によってそのような遺構であることを否定する所見を得た。まず、「周溝とみられる1条の小溝と6個の柱穴からなる住居址1基と、(後略)」と記述される住居跡であるが、周溝とされる小溝は埋蔵文化財資料館の再発掘によって、近世の小溝である可能性が強まった。小溝は東から西方向に軸をもち、長さ約5.0m、幅約25cmで検出面から底面までの深さ約6cmを測る。再発掘は第6地点の調査区外で、小溝の軸と直交するものではないが、北東から西南方向に軸をもつ暗渠や近世区画溝を検出している。この暗渠や近世区画溝からは、小溝と同様な規模と軸をもった溝が派生するものがあり、小溝の性格や帰属時期を推測させた。小溝と近世区画溝や暗渠が軸を直交させるなどの規格性をもたないのは、地形に影響された結果と考えられる。小溝の周辺に点在する直径15cm前後の小柱穴の性格は不明であるが、小溝と柱穴の配置には規則性がない。昭和58年度の再発掘においては、周辺で同様な小柱穴を多数検出しており、特別に小溝と柱穴の間に関係は認められず、住居跡を構成するような検出状況ではなかった。

溝状遺構は概報に「(前略)幅約2m、深さ60cmの溝状遺構が埋存している。溝状遺構の底部には砂層があり、上になるにつれて次第にシルト質から粘土質に漸移する。」と記

第6地点

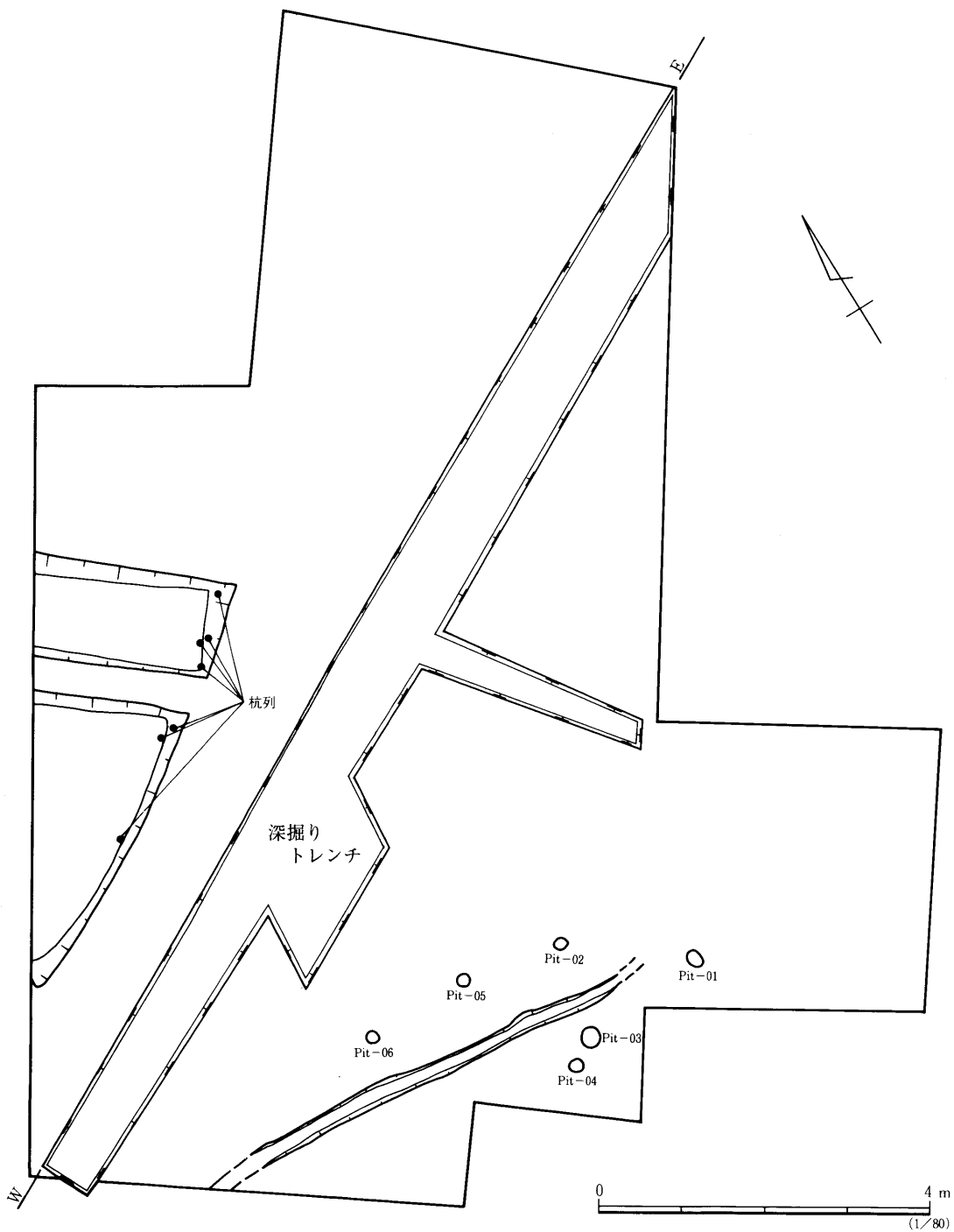


Fig. 64 第6地点遺構配置図

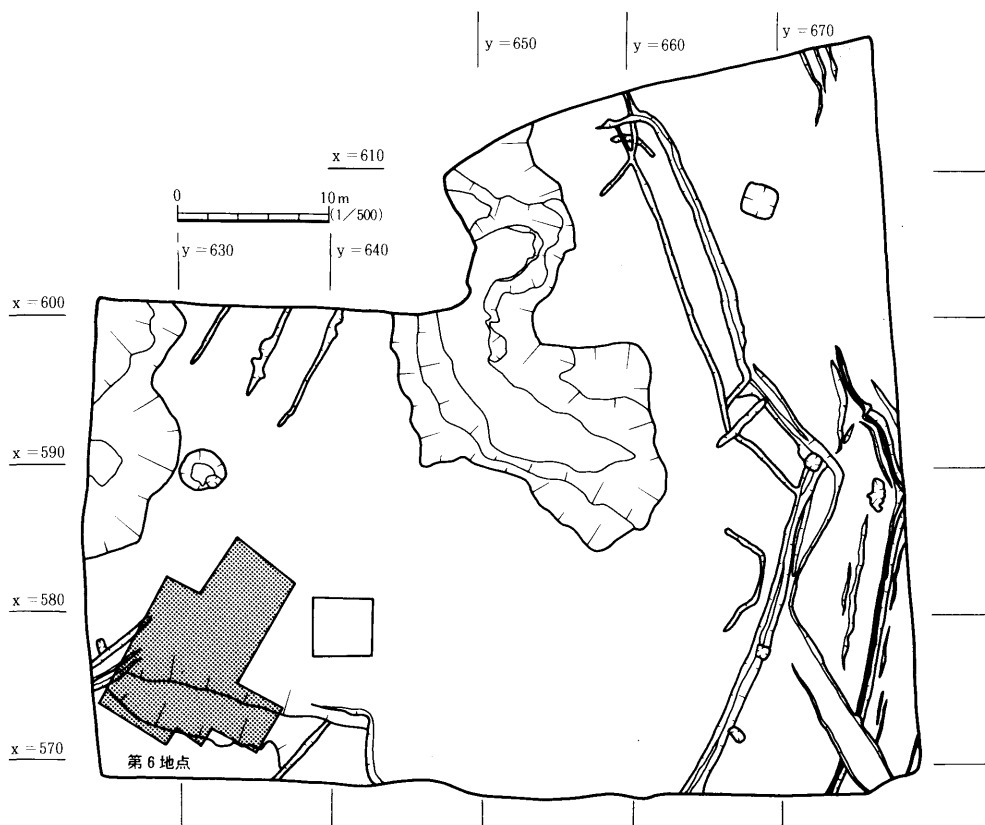


Fig. 65 第6地点と昭和58年度再調査の位置関係図

述される。しかし、土層断面図 (Fig.66) には西側の落込みが表現されるが、溝として西側に対応する東側の立ち上がりが表現されていない。地山が西側で落ち込んだまま、水平に続く状況が示されている。昭和58年度の再発掘は土層断面図と同じく、西側の肩を検出することはできたが、東側については立ち上がりが認められずそのまま落ち込んでいく状況を明らかにした。また、土層断面図では溝状遺構の埋土とされた第IV層「灰黒色粘土 (泥炭層?)」とは、再発掘の報告である年報Ⅲにおいて「第33層黒色粘土 (粘性大)」とされるものと同じと考えられる。年報Ⅲはさらに、「この第33層は南部を中心に水平に近くしかも広範囲に堆積する (後略)」と記述されている。第33層は粘性が強く、弥生土器や土師器などの遺物を多く含むことから、あたかも溝などの遺構埋土のようであるが、実際には低丘陵上からの流れ込みによって形成された遺物包含層であった。これにより「幅約2m、深さ60cm」とされた溝状遺構は、人工のものではなく自然の侵食作用が形成した谷部分の傾斜面であると推定される。

第6地点

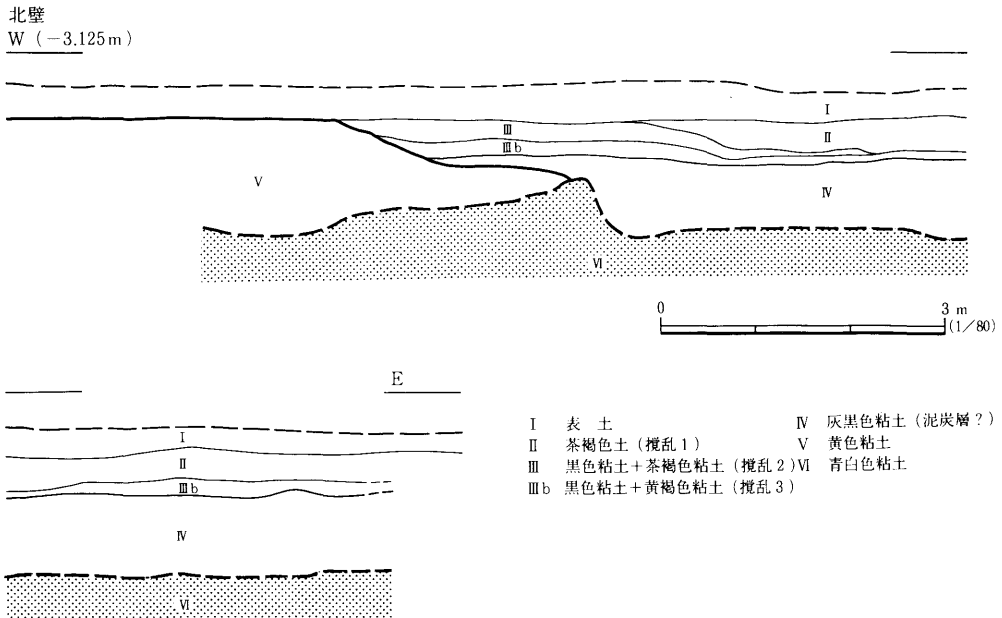


Fig. 66 第6地点土層断面図

第6地点は、次のような基本層序である (Fig.66)。

- 第I層：表土、厚さ約35cm
- 第II層：茶褐色土、厚さ約30cm
- 第III層：攪乱土、厚さ約20cm
- 第IV層：灰黒色粘土（泥炭層？）、厚さ約60cm
- 第V層：黄色粘土（地山）
- 第VI層：青白色粘土（地山）

土層断面図は、土層確認のために遺構検出後に設定された深掘りトレンチの壁面図なので、表土層は表現されていない。調査区の南側は第V層：黄色粘土の地山が高く、表土層直下で検出されている。第II・III層の堆積は、第V層が落込みそこに堆積した第IV層：灰黒色粘土の上面にだけ認められる。自然傾斜に伴い、丘陵部上面からの流れ込みが形成した堆積層であろう。第IV層：灰黒色粘土は昭和58年度の再発掘によって、本地点のみならず周囲の低地部に広く広がっていることが明らかとなっている。第V層：黄色粘土と第VI層：青白色粘土を侵食して谷地形が形成され、その低地部に遺物包含層である第IV層：灰黒色粘土が堆積したのと考えられる。

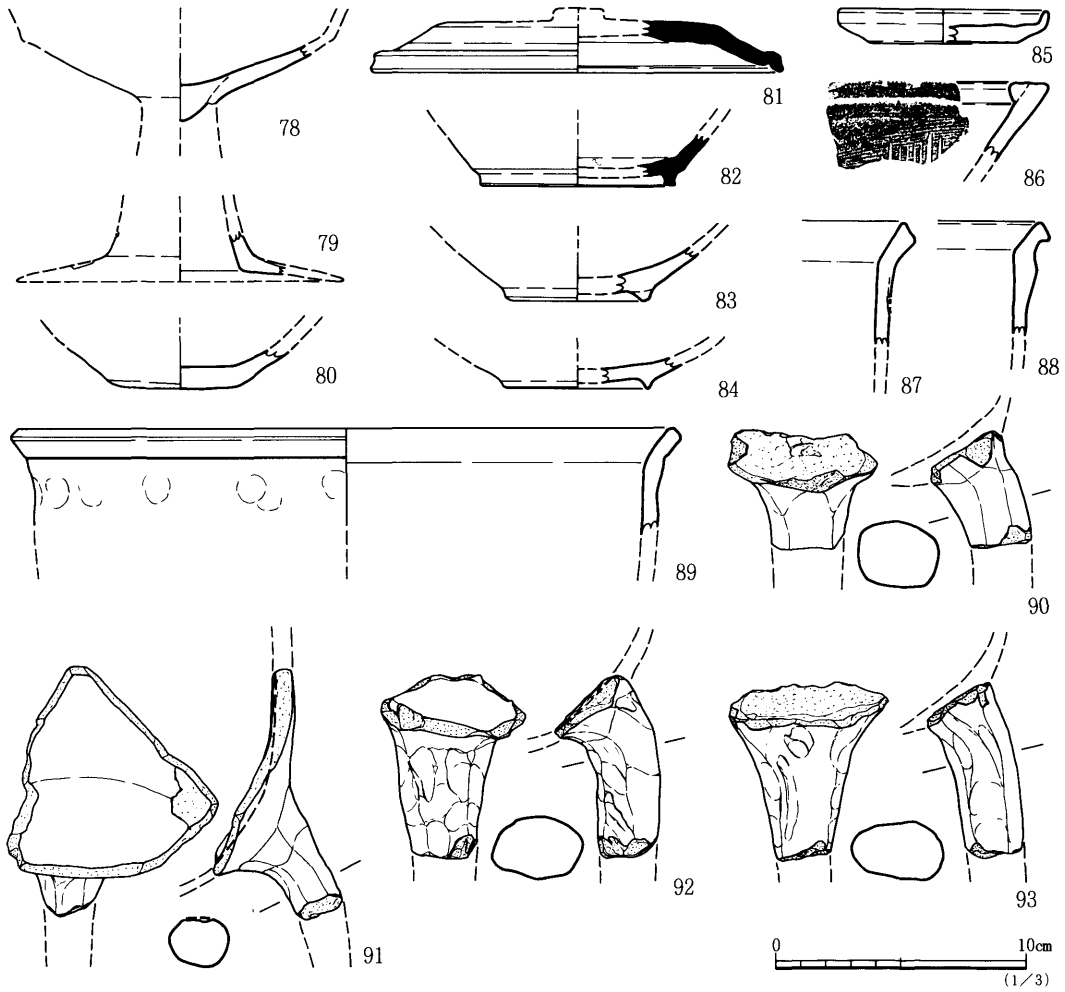


Fig. 67 第6地点出土遺物実測図(1)

第6地点出土遺物 (Fig.67-78~93, 68-94~100, PL.31(2)~33)

78・79は古墳時代中期の土師器高坏である。78は坏部の破片であり、口縁部と脚部を欠失する。脚部と坏部の接合は円盤充填技法による。79は脚部の破片であり、基部と裾端部を欠失する。裾部は強く屈曲している。80は弥生土器の甕底部であろうか。81は須恵器の坏蓋である。ほぼ水平の天井部と2段階に屈曲した口縁部をもつ。円盤状のつまみを有していたと考えられる。8世紀末の製作年代であろう。82は須恵器坏の底部である。高台は底部と胴部の屈曲部に接して貼り付けられ、その端部は幅広い接地面をもつ。9世紀前半代の製作年代と考えられる。83・84は土師器碗である。いずれも風化が激しい。85は土師器の皿である。86は瓦質土器のすり鉢である。87~89は鍋である。いずれも胴部下半を欠失するため、足付きかは明らかにすることができない。90~93は足鍋の脚部である。

第6地点

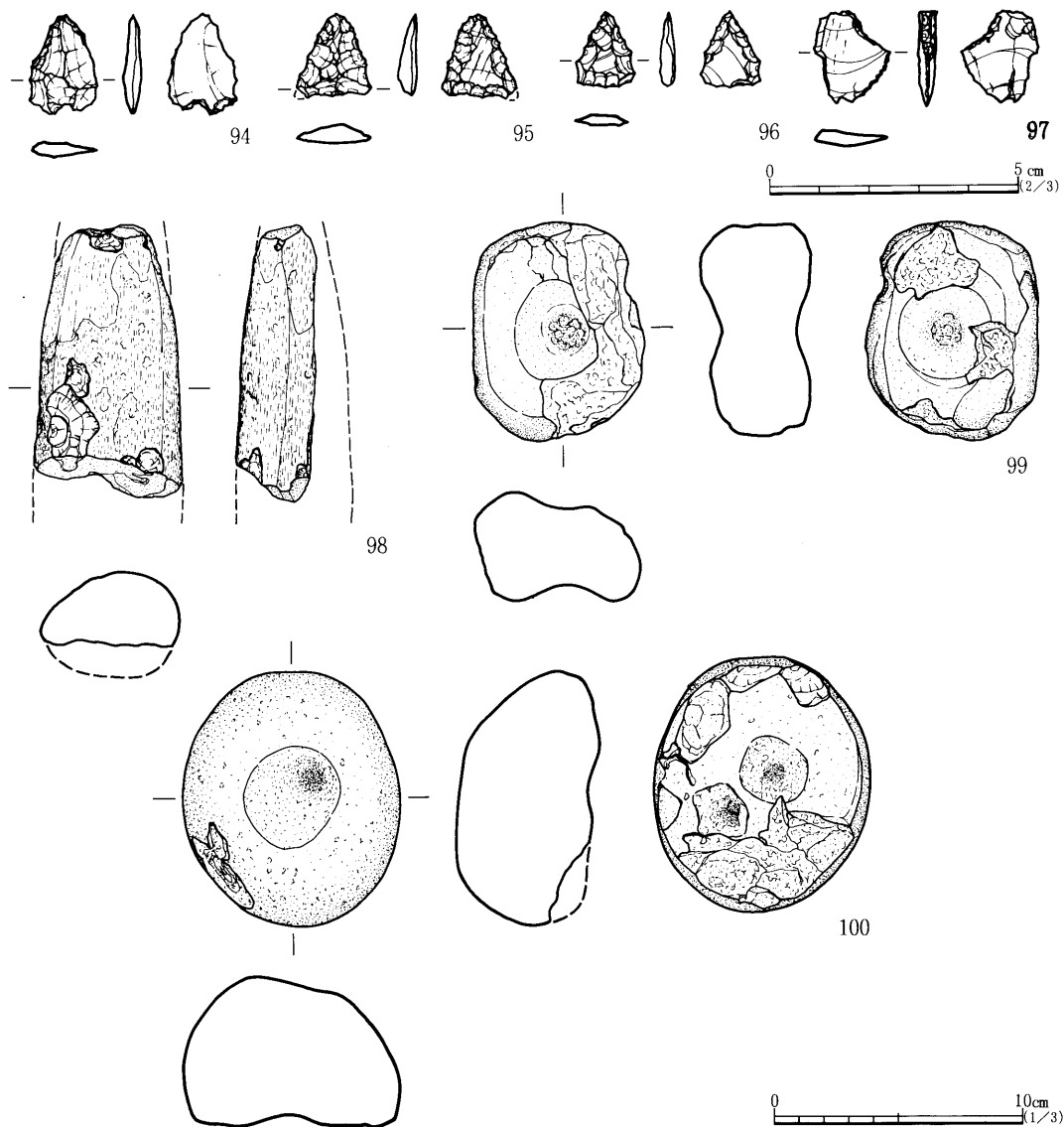


Fig. 68 第6地点出土遺物実測図(2)

94～96は石鎌である。94・95は安山岩、96は姫島産黒曜石を石材とする。97は黒曜石製の細部調整剥片である。石材は黒曜石である。ただし、94～97の石器が収納された箱には、D区の調査期間を示す「S46.4.18」の記述があるが、「吉田I-E」とも記述されている。第I地区D区第6地点ではなく、第I地区E区第6号住居跡からの出土品である可能性も残されている。98は磨製石斧である。縦に断裂しており刃部側も欠損する。結晶片岩製。99はくぼみ石である。砂岩製。100は敲き石である。安山岩製。

8 第7地点

第7地点の調査は、D区では最も遅く17日に掘削が開始されている。第7地点の調査に至る経緯は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』では記述が行われていない。ただし、調査日誌の工程を見ると第7地点の調査開始に対応して、D区の低地部（第1・2・5地点）が17日の第5地点の調査をもって全工程を終了している。第7地点は、D区低地部における遺構の残存状態が調査団の予想に反してきわめて悪く予定よりも早く調査が終了したため、D区丘陵部の第4地点と第6地点で検出された「溝状遺構」の関連を検討するため追加調査されたものと推測される。

第7地点の調査区規模に関する記述は、『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』には認められない。しかし、第Ⅰ地区D区トレンチ設定図（Fig.50）によれば、カタカナの「コ」の字状をしたトレンチが設定されている。幅約1mの細長いトレンチが上端と下端のトレンチの長さは均等ではなく、上端が約13.0m、下端が約20.0mと下端が長い。上端のトレンチと下端のトレンチを東端でつなぐトレンチの長さは約12.0mである。第6地点の調査は前述したように4月17日から始まり、4月21日頃には終了していたようである。

第7地点の調査は先にも記述したように、第4地点と第6地点で検出された「溝状遺構」の関連を把握する目的で設定されている。発掘調査概報によれば、「溝状遺構は幅約3m、深さ40cmを測り、第2地点（第4地点の誤りか）から来た溝が急角度に方向を西に転じ、第6地点の溝状遺構に連なっている」とされる。しかし、第6地点において記述したように、「溝状遺構」は自然の谷地形であり、第7地点についても同様と考えられる。第7地点は昭和58年度の大学会館調査区とは直接重なり合わないものの近接しており、その位置関係は昭和58年度調査で検出された「北ないしは北西に開ける谷あい」の上部にあたる。

第6地点は、次のような基本層序である（Fig.69）。

第Ⅰ層：表土、厚さ約15cm

第Ⅱ層：耕土、厚さ約10cm

第Ⅲ層：客土、厚さ約10cm

第Ⅳ層：黒褐色土、厚さ25～40cm

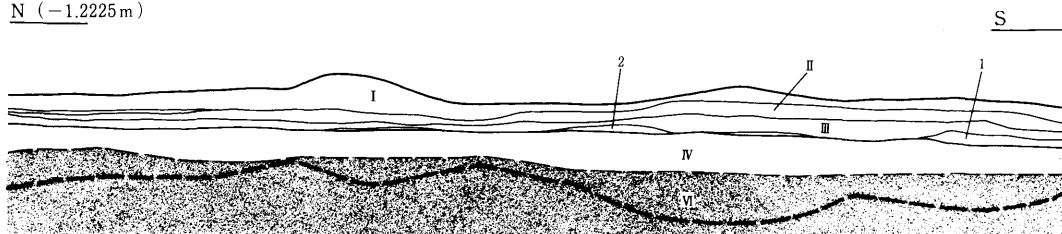
第Ⅴ層：黒色粘土、厚さ約30cm

第Ⅵ層：黒色シルト質粘土、厚さ1.0m以上

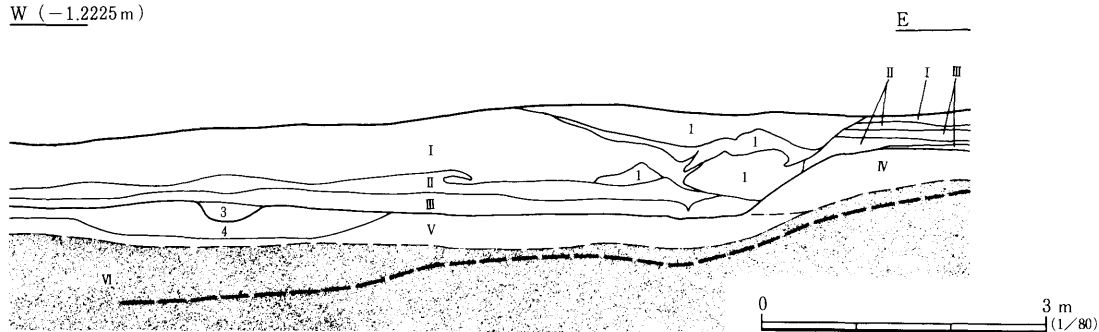
北トレンチの東側にある第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層を切り込んだ段差は、近世の開墾によるものであろう。第Ⅳ・Ⅴ層は谷地形の傾斜面に堆積した、流れ込みによる遺物包含層である。

第7地点

南北トレンチ
N (-1.2225 m)



北トレンチ北壁
W (-1.2225 m)



- | | | | |
|--------|-------------|------------|--------|
| I 表土 | IV 黒褐色土 | 1 攪乱土 | 4 茶褐色土 |
| II 耕土 | V 黒色粘土 | 2 酸化物集積 | |
| III 客土 | VI 黒色シルト質粘土 | 3 褐色土(暗渠?) | |

Fig. 69 第7地点土層断面図

第7地点出土遺物 (Fig.70, PL.34(1))

101は高台をもつ須恵器
 坏である。胴部はやや内弯
 気味に立ち上がり、口縁部
 は外反する。高台は断面が
 逆台形を呈し、わずかに突
 出した外端面が接地する。
 底面にはヘラ切り痕を残す。
 102は高台のない須恵器坏
 の底部である。103は土師
 器坏の底部である。104は
 須恵質土器の鉢底部である。
 105は足鍋の脚部である。

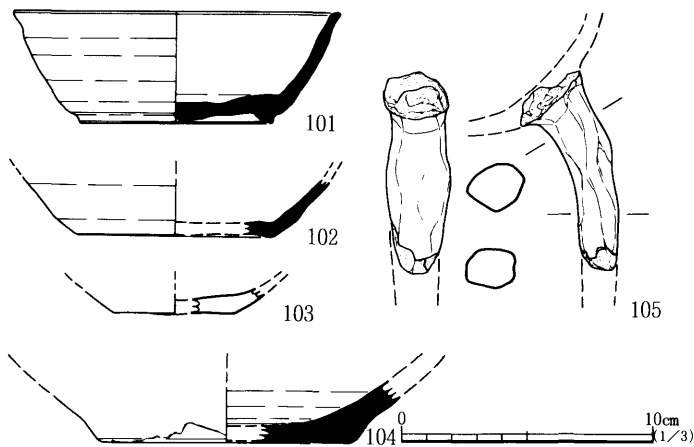


Fig. 70 第7地点出土遺物実測図

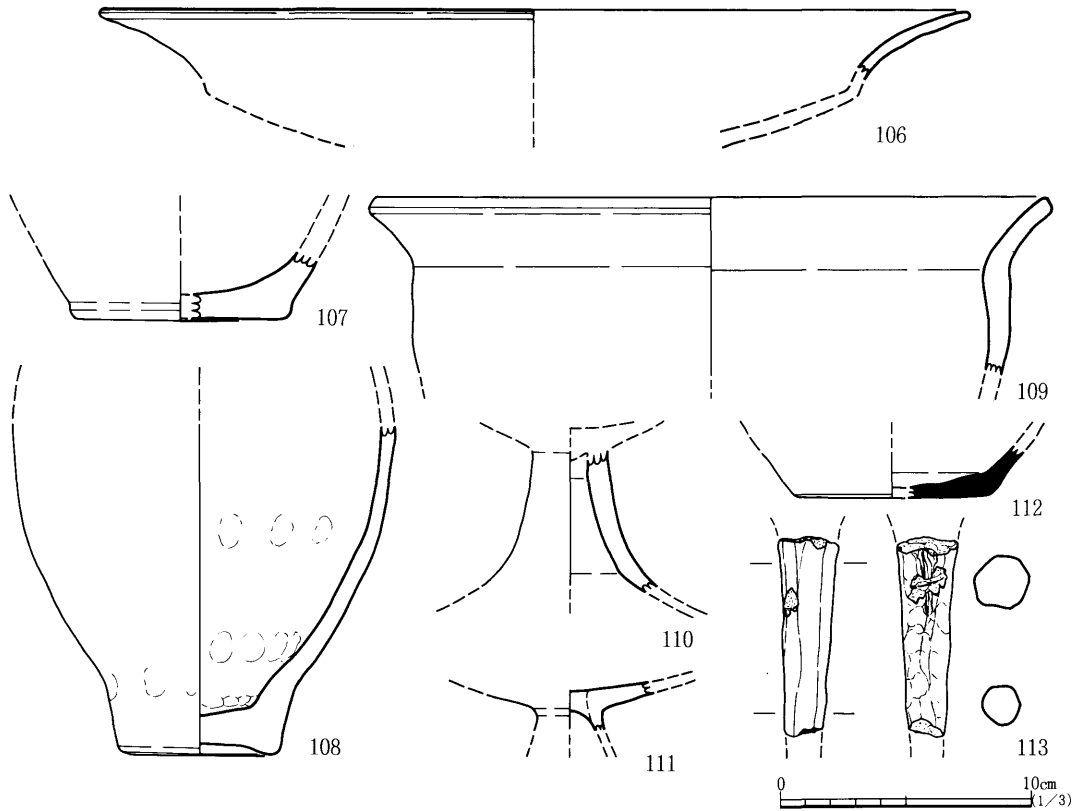


Fig. 71 出土地不明遺物実測図

9 出土地点不明遺物 (Fig.71, PL.34(2))

ここに掲載する遺物は、第I地区D区の遺物コンテナに収納されてはいるが、出土地点
が不明なものである。また、中には注記されているものもあるが、器面の剥落などによっ
て残念ながら判読出来ないものも含まれている。

106は高坏の口縁部である。口縁部は大きく外側に開く。風化が激しく、調整は観察す
ることが出来ない。弥生時代後期の土器である。107は弥生土器の底部であるが、風化が
激しいため調整を観察することができず、器種を判定することが出来ない。108は前述し
たように、第5地点出土の可能性が高い土器である。埋蔵文化財資料館には出土状況の写
真PL.23(3)が保存されている。109は甕の口縁部である。口縁部はゆるく外反し、その端
部は面をもつ。風化が激しい。弥生時代中期の土器であろうか。110・111は古墳時代中期
の土師器高坏である。110は脚部である。坏部と裾部を欠失する。裾部の屈曲はさほど明
瞭ではない。111は坏部と脚基部の破片である。脚部内側から粘土が充填される。112は須
恵器の高台をもたない坏である。底面にはヘラ切り痕を残す。風化が激しい。113は足鍋
の脚部である。風化が激しい。

10 小結

吉田調査団の記録によれば、第Ⅰ地区D区からは大溝2条、住居跡3棟、土壇4基、柱穴多数などの遺構を検出したことになっている。出土遺物は前期弥生土器から近世陶磁器までを含んでいる。しかし、吉田遺跡調査団が過去に遺構としてきたものが、今回の再検討により遺構ではない可能性が強まった。特に、環濠集落の周濠とみなした第4・6・7地点の溝状遺構が、自然地形の谷部分であったことは、昭和58年度に行われた大学会館新営に伴う発掘調査からも明らかである。第1地点の溝状遺構もまた、平成5年度本部裏給水管埋設に伴う発掘調査により、近世の大溝である可能性が強まっている。その他、住居跡と呼ばれる遺構につき、第3地点のものについては規模的に無理な点があり、第4地点の竪穴住居跡については下層遺構との出土遺物に時間的整合性を欠いており、他遺構を事実誤認した可能性が強い。

また、第Ⅰ地区D区の出土遺物には、大学会館の調査では多数出土した緑釉陶器・青磁・白磁が含まれていない。昭和54年度本部2号館新営に伴う発掘調査や昭和59年度大学会館排水管布設に伴う発掘調査、平成5年度本部裏給水管埋設に伴う発掘調査でも一定量の青磁・白磁が出土している以上、これらに近接あるいは重なった第Ⅰ地区D区から出土しなかったとは考え難い。昭和46年当時の発掘水準を考えれば、陶磁器類は「ひかりもの」として採集されなかったことも想定しうる。ただし、吉田遺跡調査団の調査主任であった小野忠熙氏は、昭和41年から近世須佐窯の発掘調査を行っており、いち早く中・近世考古学に目を向けていた研究者の一人である。吉田遺跡調査団が陶磁器類を軽視していたとも考え難い。遺物保管場所のたび重なる移転によって、散逸してしまっているのであろうか。

第Ⅰ地区D区の調査は、20年以上も前の調査であり、現在の知見からすれば不備な点や風化してしまっている点も多い。しかし、発掘成果に再検討が必要となろうとも、吉田遺跡調査団のおこなった第Ⅰ地区D区の調査そのものを否定できるものではない。表土層が薄いために耕作によって露出した遺物にいち早く着目し、試掘調査を行うことによって遺物包含層及び遺構が埋存することを明らかにしたのが吉田遺跡調査団である。第Ⅰ地区D区の全面調査を行うのではなく、保存を前提とした最小限の試掘調査を行うことによって本地区の重要性を全学に訴えたのである。部分的な調査のため、遺構の解釈に一部誤認があったとしてもそれは致し方ないことである。むしろ、保存を目的として遺構に過大な評価を与えていた可能性すら考えられる。現在、第Ⅰ地区D区の大部分は、昭和46年の当時と同じ飼料園であるが、1mに近い盛り土がなされており、埋蔵文化財に耕作による影響

吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査

が及ぶことはない。調査を最小限にとどめることによって、第Ⅰ地区D区を将来に引き継いだ吉田遺跡調査団の姿勢こそ高く評価されるべきである。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」「吉田遺跡第Ⅰ地区B区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XI、1993年)
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XII、1994年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』VIII、1990年)
- 5) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』III、1985年)
- 6) 森田孝一「周防国吉敷郡吉田における古代・中世の様相—吉田遺跡をめぐる諸問題—」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』IV、1985年)
- 7) 山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報』(山口大学、1971年)
- 8) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』XIII、1995年)
- 9) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」(『山口考古』第17号、1988年)

Tab. 5 出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	注記	備考
P.D. 1						
1	弥生土器 複合口縁壺 口縁部		①淡褐色 ②淡灰黒色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中No.③ S46.4.21	風化が激しい
2	弥生土器 高坏 脚部	② (13.6)	赤褐色	1~2mmの砂粒を多量 に含む		風化が激しい 復元底径誤差あり
3	弥生土器 壺 底部	② (4.9)	乳白色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
4	弥生土器 壺 底部	② (2.5)	淡黄灰色	1cm大の角礫を含む		風化が激しい
5	弥生土器 壺 底部	② (3.1)	①赤褐色 ②淡褐色	砂粒を多量に含む		風化が激しい
6	土師器 高坏口縁部	① (15.8)	①暗褐色 ②淡赤褐色	2~4mmの砂粒を含む	包含層中No.4 1971.4.21	風化が激しい
7	土師器 高坏 脚部	② (14.8)	赤褐色	1~3mmの砂粒を多量に 含む、黒雲母を含む		風化が激しい 孔径6.5mm
8	須恵器 坏身		青灰色	精製粘土		
9	瓦質土器 鍋 口縁部	① (27.8)	黒灰色	1~2mmの砂粒を含む	包含層中No.4 S46.4.22	
10	瓦質土器 鍋 口縁部	① (23.4)	①黒灰色 ②暗灰色	微砂粒を多量に含む	包含層中No.3 S46.4.21	復元口径誤差あり
11	瓦質土器 鍋 口縁部	① (22.4)	①淡灰黄色 ②黒灰色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中No.3 S46.4.21	風化が激しい
12	瓦質土器 足鍋 脚部		灰褐色	砂粒を含む		風化が激しい
13	瓦質土器 足鍋 脚部		灰褐色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中No.1 1971.4.12	風化が激しい
14	土師器 碗 底部	② (5.6)	白黄色	微砂粒を多量に含む	包含層No.1 1971.4.22	風化が激しい
15	土師器 碗 底部	② (5.3)	淡褐色	微砂粒を多量に含む		風化が激しい
16	土師器 碗 底部	② (6.7)	灰白色	緻密		風化が激しい
17	土師器 碗 底部	② (5.4)	淡赤褐色	赤色斑粒を含む		風化が激しい
18	土師器 碗 底部	② (5.5)	淡赤褐色	赤色斑粒を含む		糸切り底
19	土錘	直径1.0 孔径0.4	黒灰色	精製粘土		風化が激しい
P.D. 2						
20	土師器 高坏 坏部		淡褐色	赤色斑粒を含む		風化が激しい
21	土師器 皿 底部	② (4.5)	淡黄灰色	精製粘土に2mm弱の 砂粒を含む		風化が激しい
22	粗陶器 甕 口縁部		明褐色	1mm前後の砂粒を含 む		内面タタキ後ハケ
23	瓦質土器 足鍋 脚部		青灰色	微砂粒を含むが緻密		脚部外面に多数の指 頭圧痕
24	粗陶器 甕 底部	② (17.0)	明褐色	1~2mmの砂粒を含む		外面の凹凸が激しい
P.D. 3						
27	弥生土器 高坏 脚部		灰白色	1~2mmの砂粒を含む	No.2 1971.4.15	
28	瓦質土器 鍋 口縁部	① (29.7)	淡青灰色	緻密		復元口径誤差あり
29	瓦質土器 鍋 口縁部	① (31.2)	①淡赤褐色 ②淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	No.1 S46.4.15	内面ハケ、罫に指頭 圧痕、器面風化
30	瓦質土器 足鍋 脚部		黄灰色	1~2mmの砂粒を含む		脚部外面に多数の指 頭圧痕
31	瓦質土器 足鍋 脚部		淡赤色	砂粒を多量に含む		
P.D. 4						
33	弥生土器 有文壺		①明褐色 ②黄灰色	2~3mmの砂粒を含む		鋸歯状圧痕のつかない 貝殻による押圧羽状文
34	弥生土器 有文壺		淡黄白色	2mm前後の砂粒を含 む	包含層中	鋸歯状圧痕のつく貝殻に よる押圧羽状文・重弧文
35	弥生土器 垂下口縁壺		淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		内面に隆帯
36	弥生土器 垂下口縁壺		淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
37	弥生土器 垂下口縁壺		淡黄灰色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
38	弥生土器 垂下口縁壺		淡黄灰色	精製粘土に微砂粒を 含む		
39	弥生土器 甕 口縁部	① (19.5)	褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化が激しい

吉田遺跡第I地区D区の調査

法量()は復元値

番号	器種	法量 (cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	注記	備考
40	弥生土器 甕 口縁部	① (17.5)	淡赤褐色	赤色斑粒を含む		風化が激しい
41	弥生土器 甕 口縁部	① (18.8)	淡赤色	精製粘土に2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
42	弥生土器 高坏 脚部		乳白色 一部黒斑	1mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
43	土師器 高坏 杯部		淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	包含層中 1971.4.20	風化が激しい
44	弥生土器 壺 底部	② (9.0)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	包含層中 1971.4.21	風化するが内面にミガキを残す
45	弥生土器 甕 底部	② (8.4)	赤褐色	砂粒を多量に含む		風化が激しい
46	弥生土器 甕 底部	② (6.3)	①淡赤色 ②灰色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
47	弥生土器 甕 底部	② (6.7)	淡黄色	3~4mm砂粒を含む		風化が激しい
48	土師器 碗 口縁部	① (14.3)	淡灰黄色	精製粘土		風化が激しい
49	土師器 碗 底部	③ (6.0)	暗灰褐色	1mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
50	土師器 碗 底部	②5.9	淡灰褐色	精製粘土に砂粒を含む		風化が激しい
51	土師器 碗 底部	②6.9	淡灰褐色	赤色斑粒を含む		糸切り底、板状圧痕、ロクロ痕
52	瓦質土器 甕or鉢底部	② (16.0)	淡灰褐色	3~5mmの砂粒を含む	攪乱層中 S46.4.20	
53	瓦質土器 甕or鉢底部	② (18.8)	灰白色	微砂粒を含む	攪乱層中 S46.4.20	
54	瓦質土器 足鍋 脚部		淡赤褐色	砂粒を多量に含む		
55	瓦質土器 足鍋 脚部		赤褐色	砂粒を多量に含む		
56	粗陶器 鍋 口縁部	① (37.4)	淡褐色	微砂粒を多量に含む	攪乱層中 S46.4.20	
57	粗陶器 鍋 口縁部	① (25.2)	淡黄白色	1mm弱の砂粒を多量に含む		
58	陶器 碗 底部	② (4.3)	素地 淡褐色 釉調 緑灰色	微砂粒を含む	攪乱層中 S46.4.20	
59	陶器 鉢 底部	②9.2	素地 暗赤褐色 釉調 黄緑色	緻密	攪乱層中 S46.4.20	
60	陶器 すり鉢	① (15.3)	暗赤褐色	緻密	攪乱層中 S46.4.20	
61	陶器 すり鉢		暗赤褐色	緻密	攪乱層中 S46.4.20	
62	粗陶器 土瓶 把っ手		明淡褐色	精製粘土	攪乱層中 S46.4.20	
63	粗陶器 土瓶 注口		明淡褐色	精製粘土	攪乱層中 S46.4.20	
64	粗陶器 土瓶 注口		灰褐色	緻密	攪乱層中 S46.4.20	
P.D. 5						
74	弥生土器 甕		淡灰褐色	2~3mmの砂粒を含む		外面に刺突文 風化が激しい
75	土師器 碗 底部	② (6.0)	乳白色	精製粘土に1mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
76	土師器 皿 底部	② (5.0)	淡赤灰色	精製粘土		風化が激しい
77	瓦質土器 足鍋 脚部		①黒灰色 ②赤灰色	2~3mmの砂粒を含む		
P.D. 6						
78	土師器 高坏 坏部		淡赤褐色	1~2mmの砂粒と赤色斑粒を含む		風化が激しい
79	土師器 高坏 脚部		淡赤褐色	精製粘土		風化が激しい
80	弥生土器 甕 底部		黒灰色	石英角礫を含む		風化が激しい
81	須恵器 坏蓋	① (16.3)	淡青灰色	微砂粒を含む	トレンチIV包含層中 S46.4.13	
82	須恵器 坏 底部	② (7.7)	青灰色	白色粒を含む		
83	土師器 碗 底部	② (5.2)	淡黄灰色	精製粘土に微砂粒を含む		風化が激しい
84	土師器 碗 底部	② (5.6)	淡灰黄色	精製粘土		風化が激しい
85	土師器 皿	② (5.9)	淡赤褐色	精製粘土		風化が激しい
86	瓦質土器すり鉢口縁部		灰青色	白色粒を含む		

出土遺物観察表

法量()は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	注記	備考
87	瓦質土器 鍋 口縁部		黒色	1~2mmの砂粒を多量に含む		外面に煤が付着する
88	瓦質土器 鍋 口縁部	①(26.2)	①黒色 ②淡黄灰色	精製粘土に砂粒を含む		外面に煤が付着する
89	瓦質土器 鍋 口縁部		①煤付着 ②暗青灰色	1~2mmの砂粒を含む	No4包含層中 S46.4.19	
90	瓦質土器 足鍋 脚部		赤褐色	緻密		風化が激しい
91	瓦質土器 足鍋 脚部		黒灰色	砂粒を含む		外面に煤が付着する
92	瓦質土器 足鍋 脚部		淡褐色	緻密		風化が激しい
93	瓦質土器 足鍋 脚部		赤褐色	微砂粒を含む		風化が激しい
P.D.7						
101	須恵器 坏	①(13.0) ②(7.6)	灰青色	石英粒を含む	南北トレンチ包含層 上部S46.4.19	約1/2残存 底部へラ切り
102	須恵器 坏 底部	②(7.7)	青灰色	微砂粒を含む		
103	土師器 坏 底部	②(4.9)	淡赤褐色	大粒の砂粒を含む		風化が激しい
104	須恵質土器 鉢 底部	②(9.8)	灰青色	白色粒を含む		
105	瓦質土器 足鍋 脚部		淡赤色	赤色斑粒を含む	南北トレンチ	風化が激しい
出土地不明						
106	弥生土器 高坏口縁部	①(34.3)	淡赤褐色	1~2mmの砂粒を含む		風化が激しい
107	弥生土器 底部	②(8.0)	淡褐色	大粒の砂粒を含む		風化が激しい
108	弥生土器 甕	②(5.8)	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む		風化が激しい
109	弥生土器 甕 口縁部	①(26.8)	淡黄灰色	3~5mmの砂粒を含む	注記不明	風化が激しい
110	土師器 高坏 脚部		黒灰色	砂粒を含む	注記不明	風化が激しい
111	土師器 高坏 坏部		淡赤褐色	精製粘土に1mm前後の砂粒を含む		風化が激しい
112	須恵器 坏 底部	②(6.4)	灰白色	わずかに微砂粒を含む		風化が激しい
113	瓦質土器 足鍋 脚部		淡黒灰色	微砂粒を含む		

吉田遺跡第 I 地区 D 区の調査

法量 () は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	注記
P.D. 2							
25	石鍋	口径 (18.0) 底径 (10.0)		2.7	763.7	滑石	S46.4.12
26	砥石	10.4	6.7	5.3	517.16	石英斑岩	
P.D. 3							
32	砥石	(7.0)	(5.2)	(2.9)	97.85	凝灰岩	
P.D. 4							
65	剥片	2.6	2.7	1.1	6.57	姫島産黒曜石	包含層中 S46.4.18
66	剥片	2.2	2.3	0.7	2.69	姫島産黒曜石	包含層中 S46.4.18
67	剥片	2.0	2.2	0.5	2.95	姫島産黒曜石	包含層中 S46.4.21
68	剥片	2.8	1.8	0.8	4.57	黒曜石	
69	剥片	2.3	1.9	0.7	3.91	チャート	
70	扁平片刃石斧	4.5	(3.0)	1.0	22.21	泥岩	4-㉔ S46.4.19
71	砥石	20.0	6.9	6.1	1165.2	流紋岩	第 2 トレンチ 攪乱層 7-⑤
72	砥石	(6.5)	(3.7)	(1.4)	32.06	流紋岩	S46.4.19
73	敲き石	7.4	6.8	3.7	285.05	安山岩	S46.4.19
P.D. 6							
94	石鏃	2.1	1.4	0.4	0.91	安山岩	
95	石鏃	1.7	1.5	0.4	0.68	安山岩	
96	石鏃	1.6	1.2	0.2	0.42	姫島産黒曜石	
97	二次加工のある剥片	1.9	1.5	0.4	0.98	黒曜石	
98	石斧	(11.0)	(5.7)	(3.0)	317.92	結晶片岩	黒色土 S46.4.18
99	くぼみ石	8.8	7.0	4.5	400.33	砂岩	トレンチ A 包含層中 S46.4.18
100	くぼみ石	10.3	8.8	6.1	733.6	安山岩	S46.4.13



第1地点 第5地点 第2地点 第6地点 第7地点 第4地点
第3地点

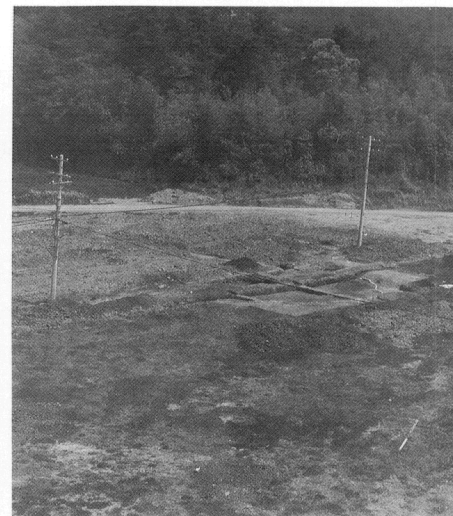
(1) 吉田遺跡第I地区D区の全景（南西から）



(2) 第1・2・5地点全景（南西から）



(3) 第3・6地点全景（南西から）



(4) 第4・7地点全景（南西から）

(1) 吉田遺跡第I地区D区の調査



(1) 第1・2地点全景(南西から)



(2) 第2地点調査風景(南西から)



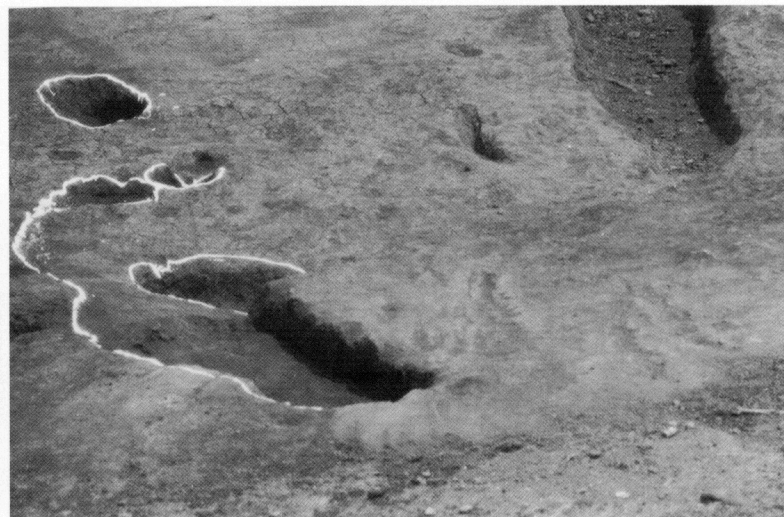
(3) 第1地点北壁土層断面



(1) 第3地点遺構完掘状況(南西から)

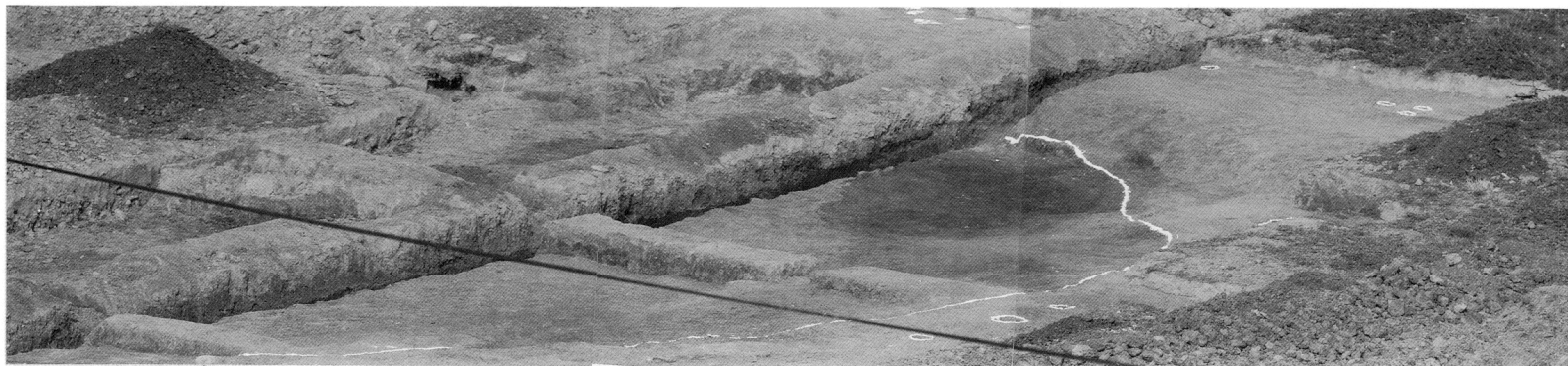


(2) 第3地点第2・3号土坑(南西から)

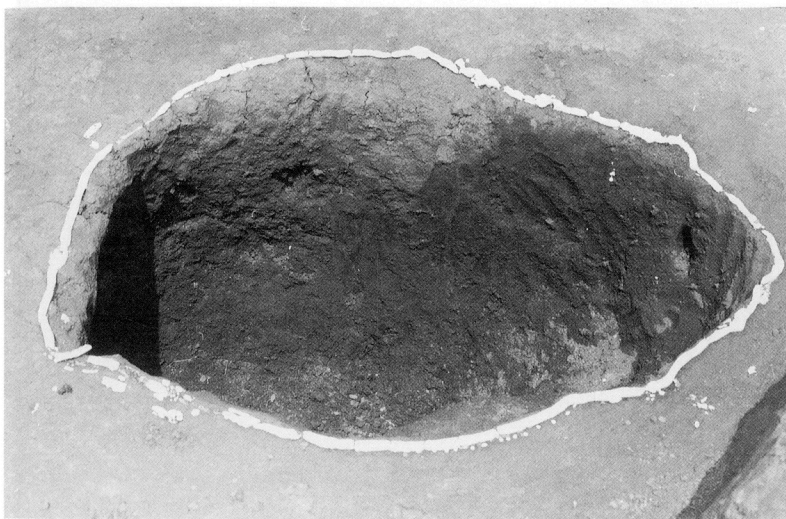


(3) 第3地点竪穴住居跡状遺構の西肩?(南西から)

吉田遺跡第1地区D区D区の調査 (3)



(1) 第4地点竖穴住居跡状遺構 (南西から)



(2) 第4地点第1号土坑 (南西から)



(3) 第4地点東西トレンチ北壁土層断面 (火山灰の再堆積層)



(1) 第5地点全景（南から）



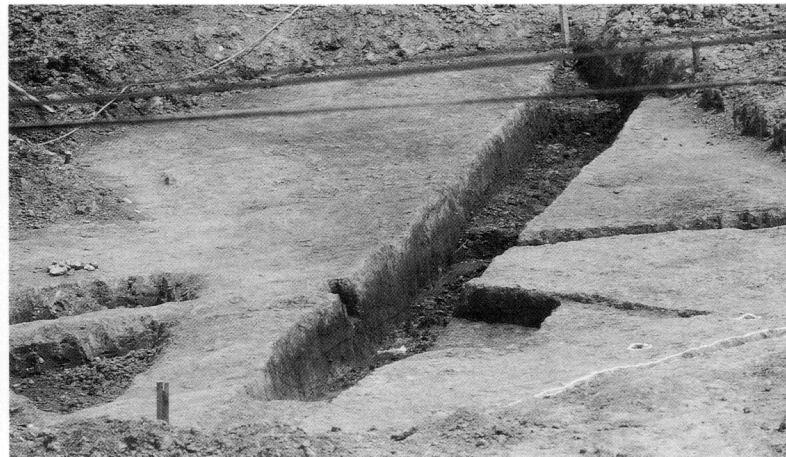
(2) 第5地点南東-北西トレンチ南壁土層断面（溝状遺構）



(3) 第5地点溝状遺構弥生土器出土状況（北東から）



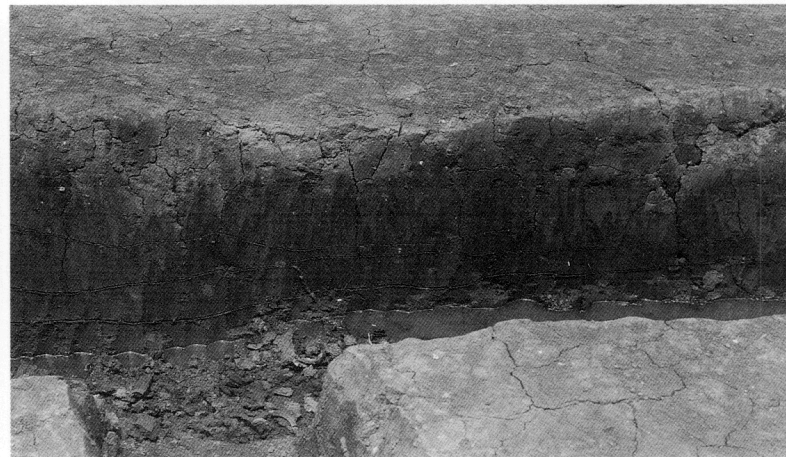
(1) 第6地点溝状遺構（東から）



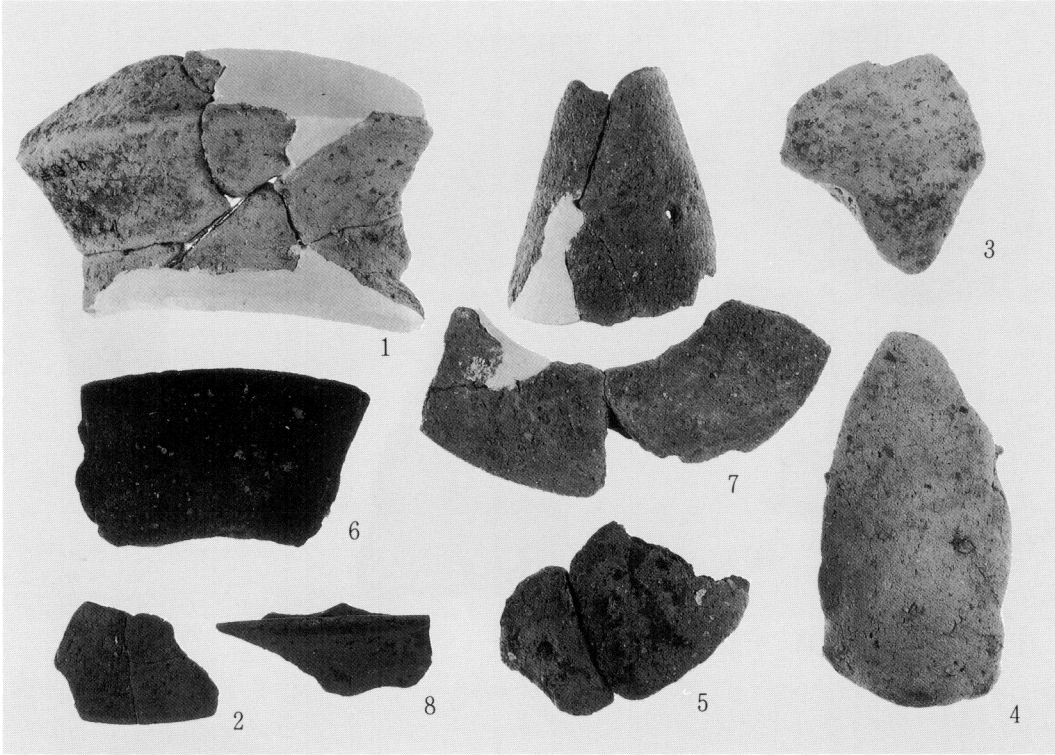
(2) 第6地点東西トレンチ（西から）



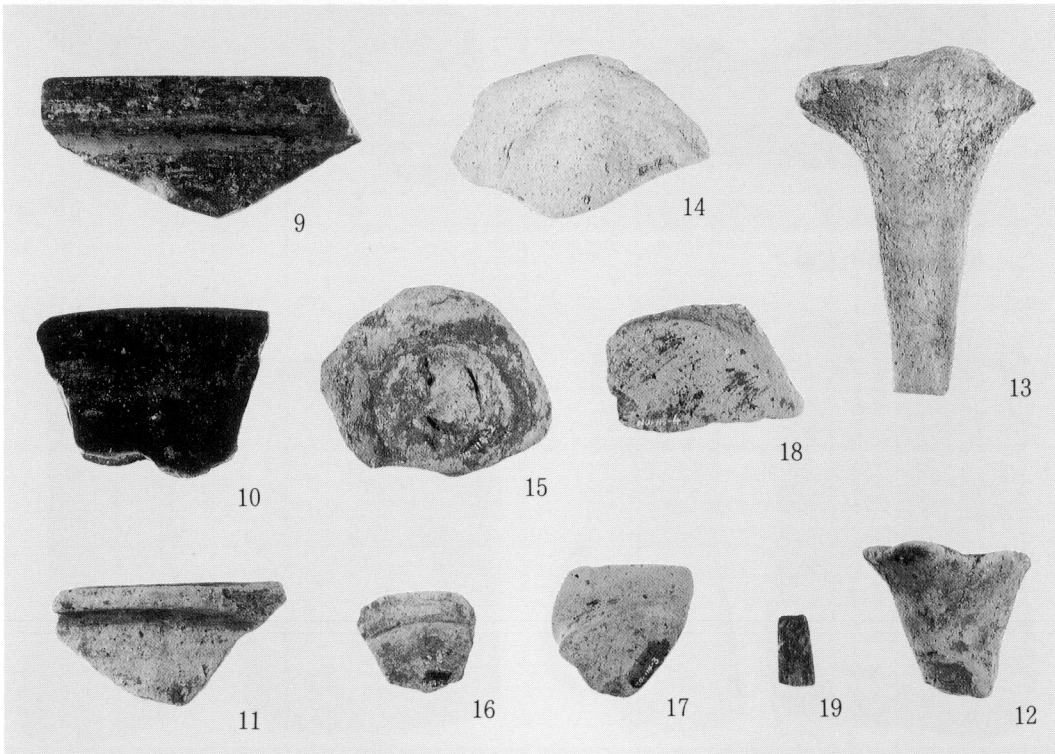
(3) 第6地点東西トレンチ北壁土層断面（落ち込み西肩）



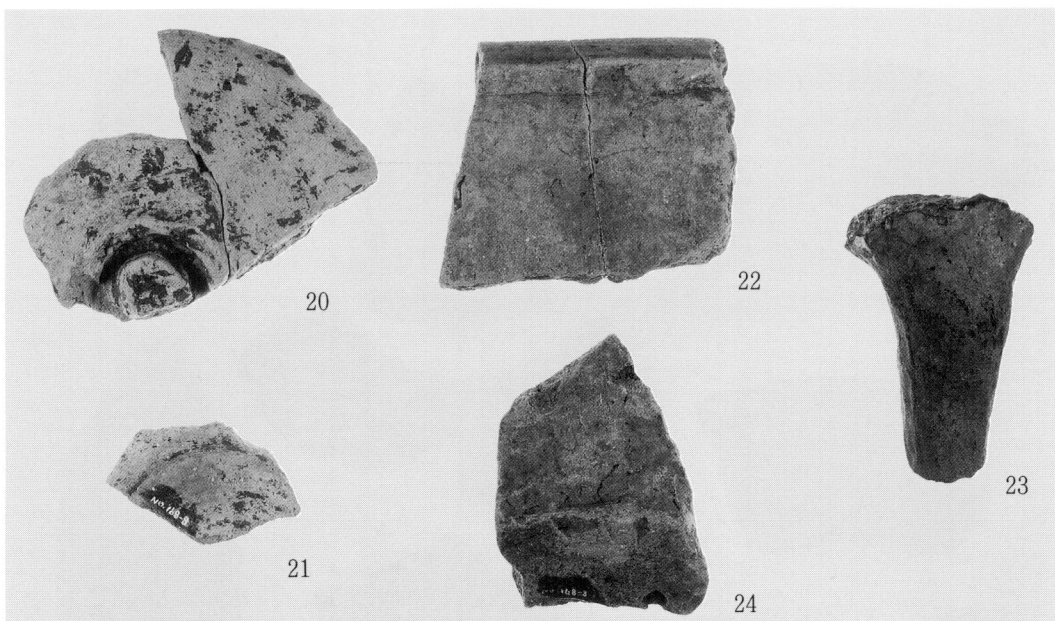
(4) 第6地点東西トレンチ北壁土層断面（落ち込み）



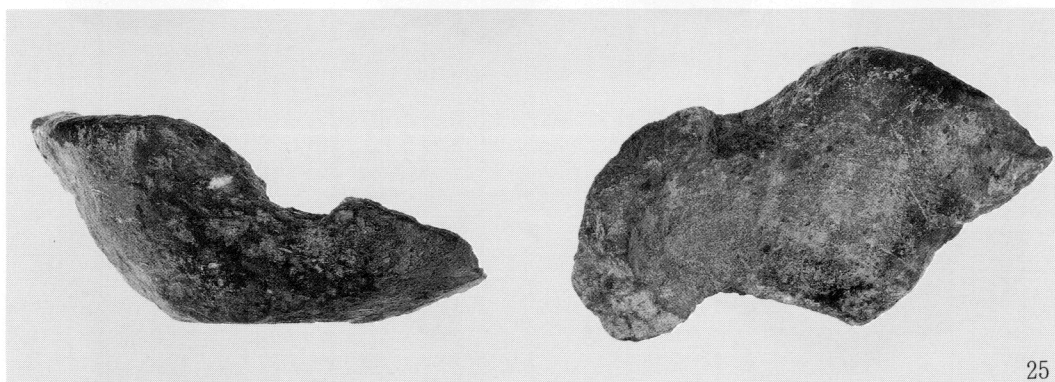
(1) 第1地点出土遺物



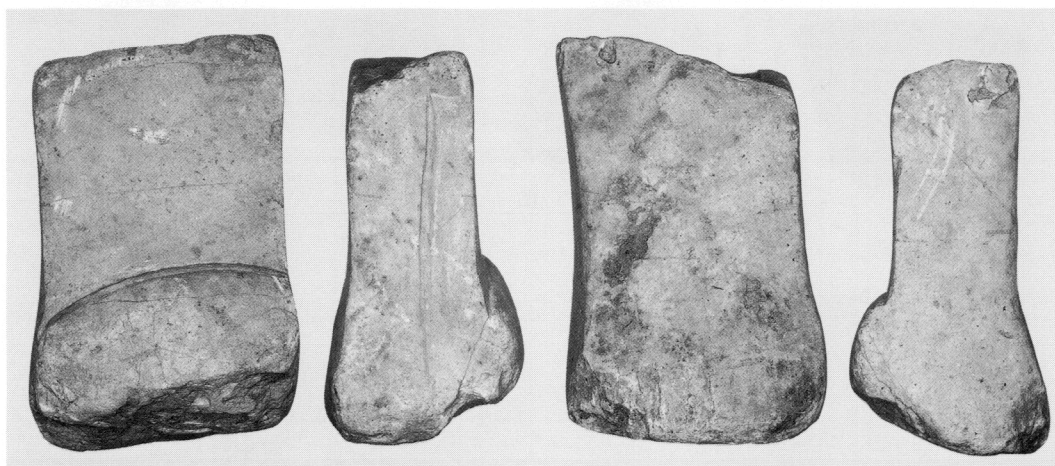
(2) 第1地点出土遺物



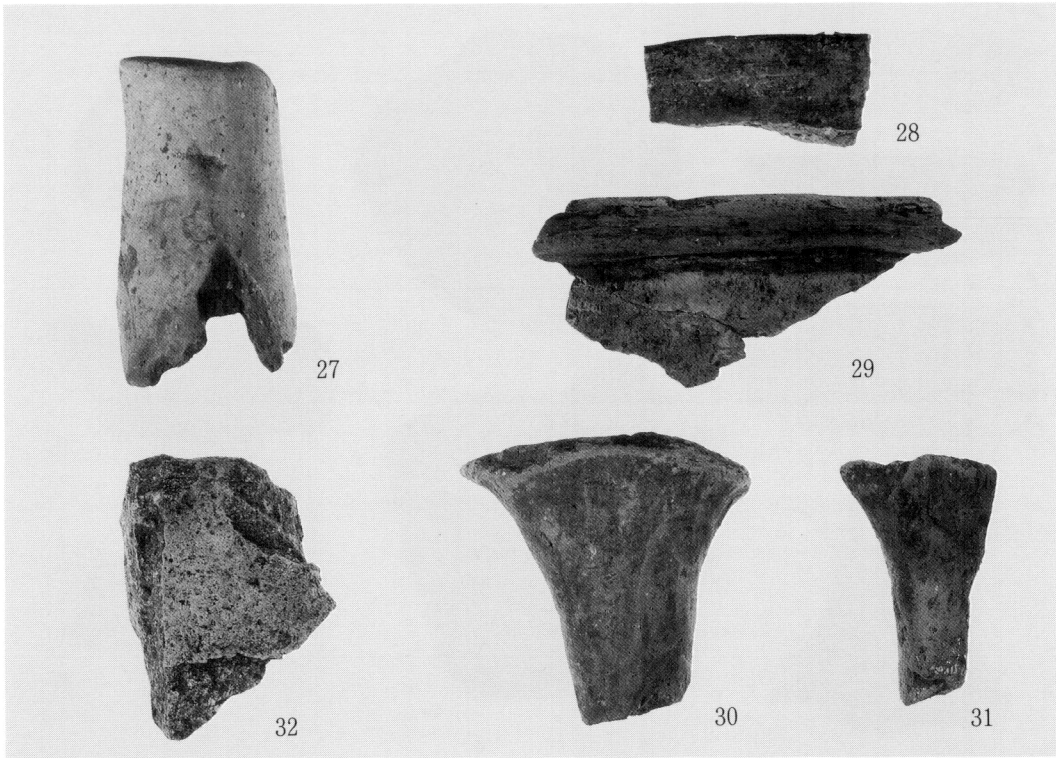
(1) 第2地点出土遺物



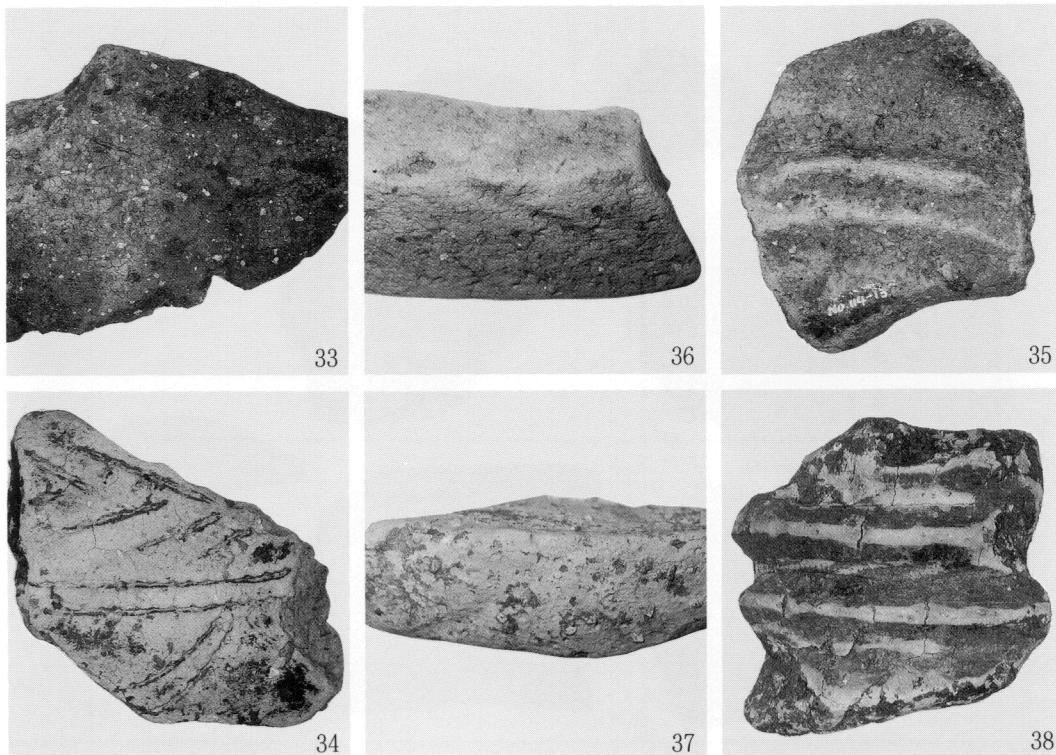
(2) 第2地点出土石鍋



(3) 第2地点出土砥石

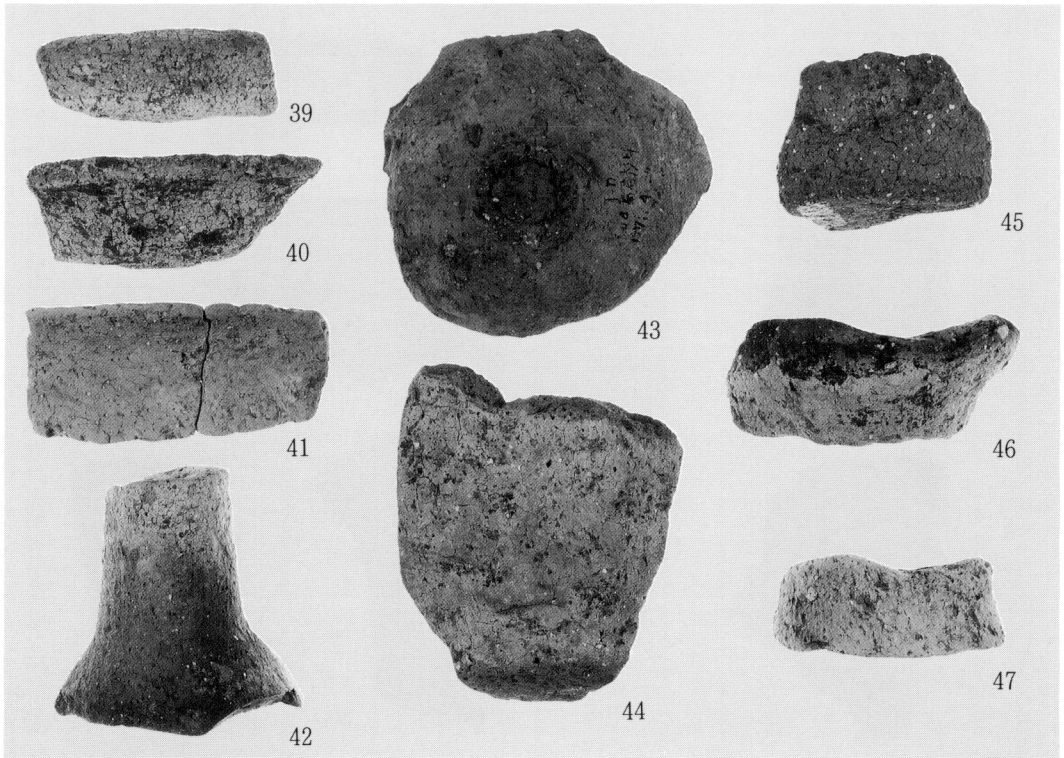


(1) 第3地点出土遺物

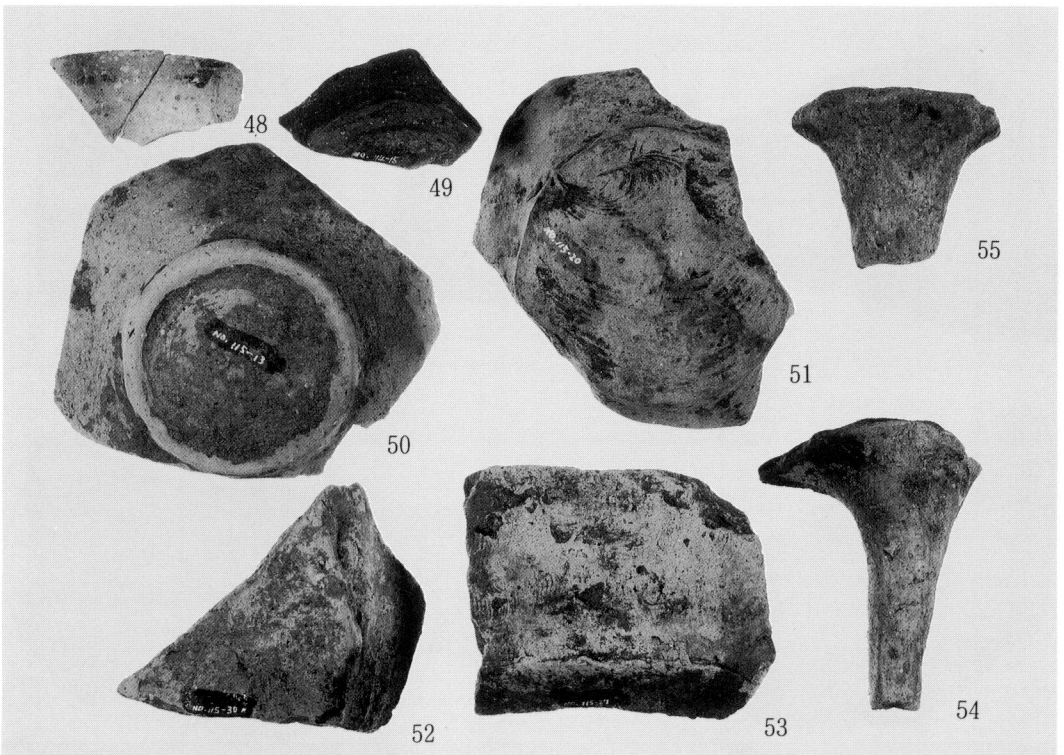


(2) 第4地点出土遺物

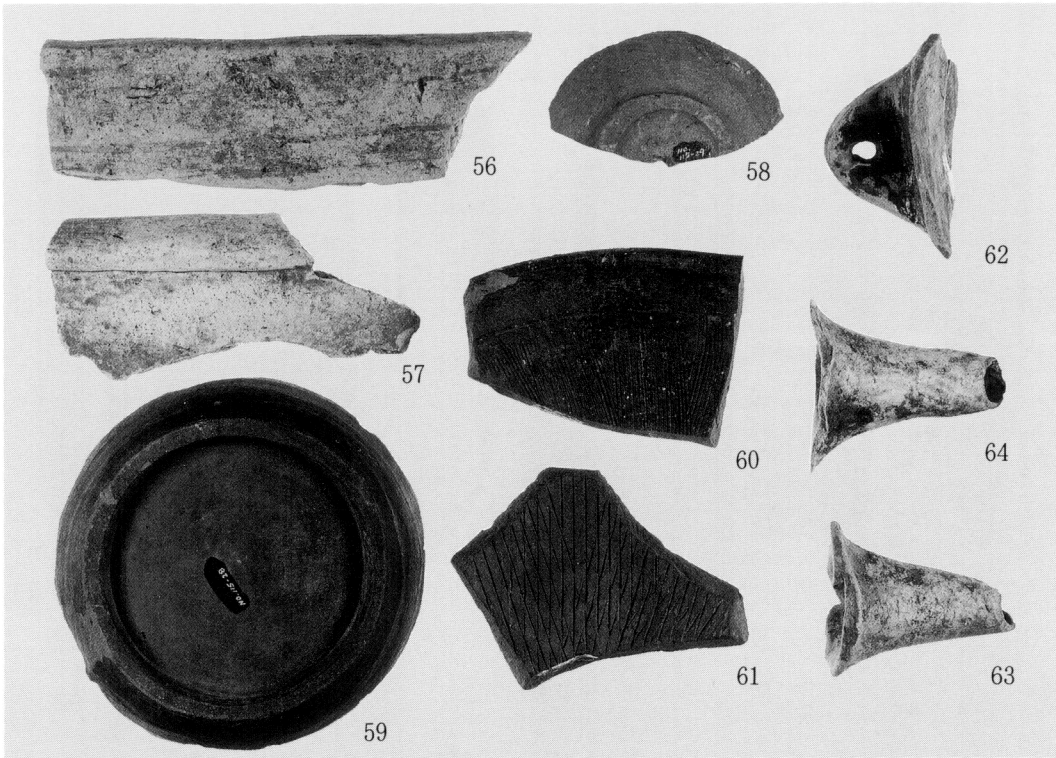
吉田遺跡第I地区D区の調査
(10)



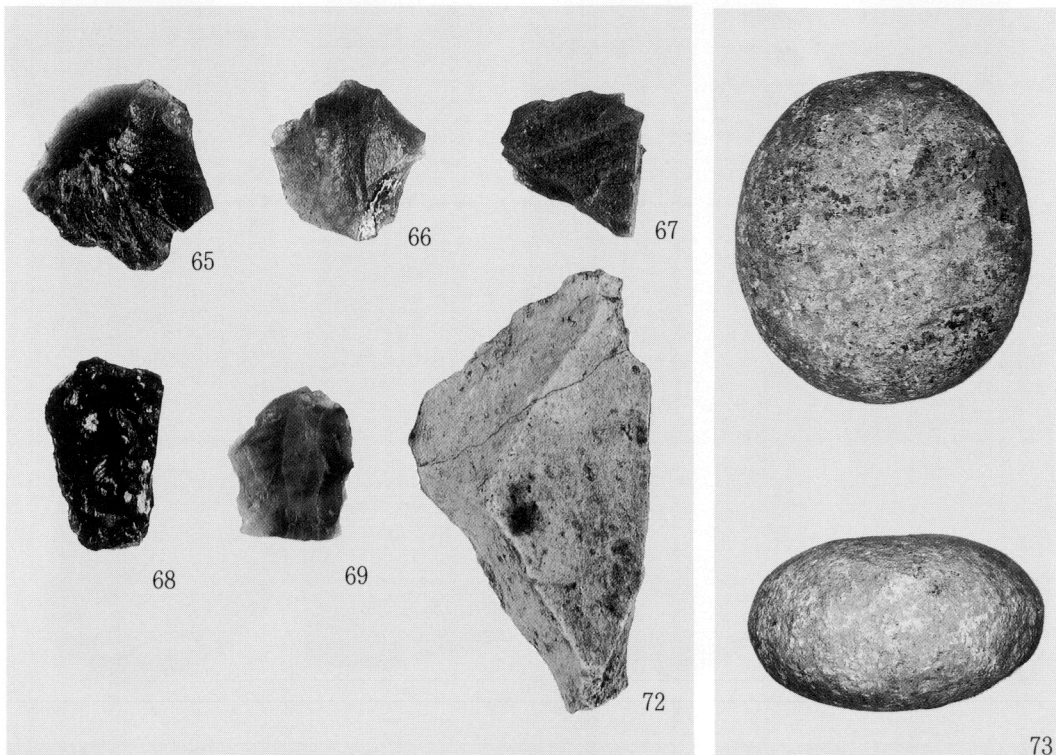
(1) 第4地点出土遺物



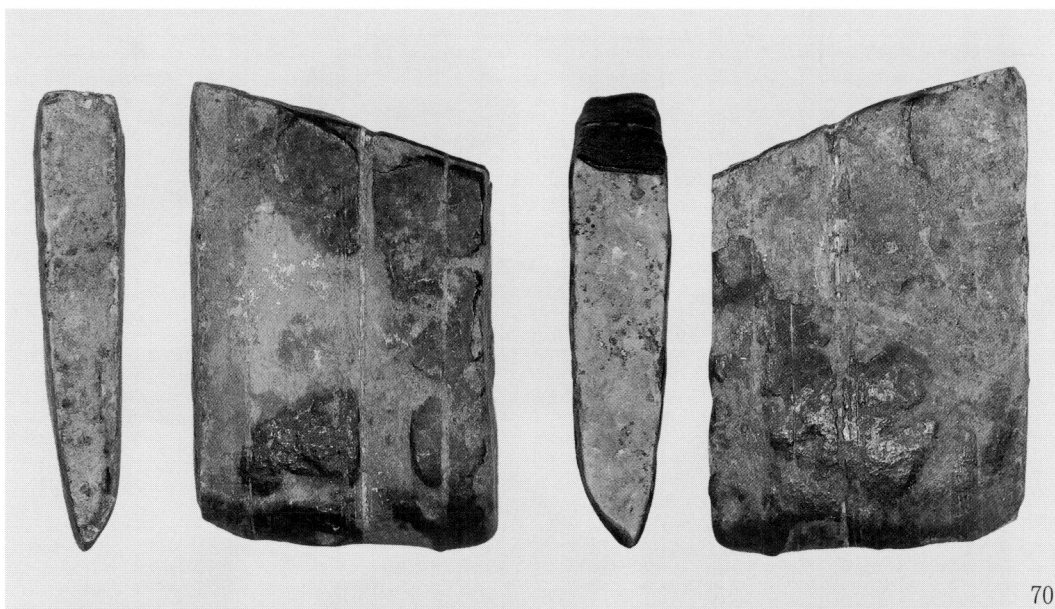
(2) 第4地点出土遺物



(1) 第4地点出土遺物

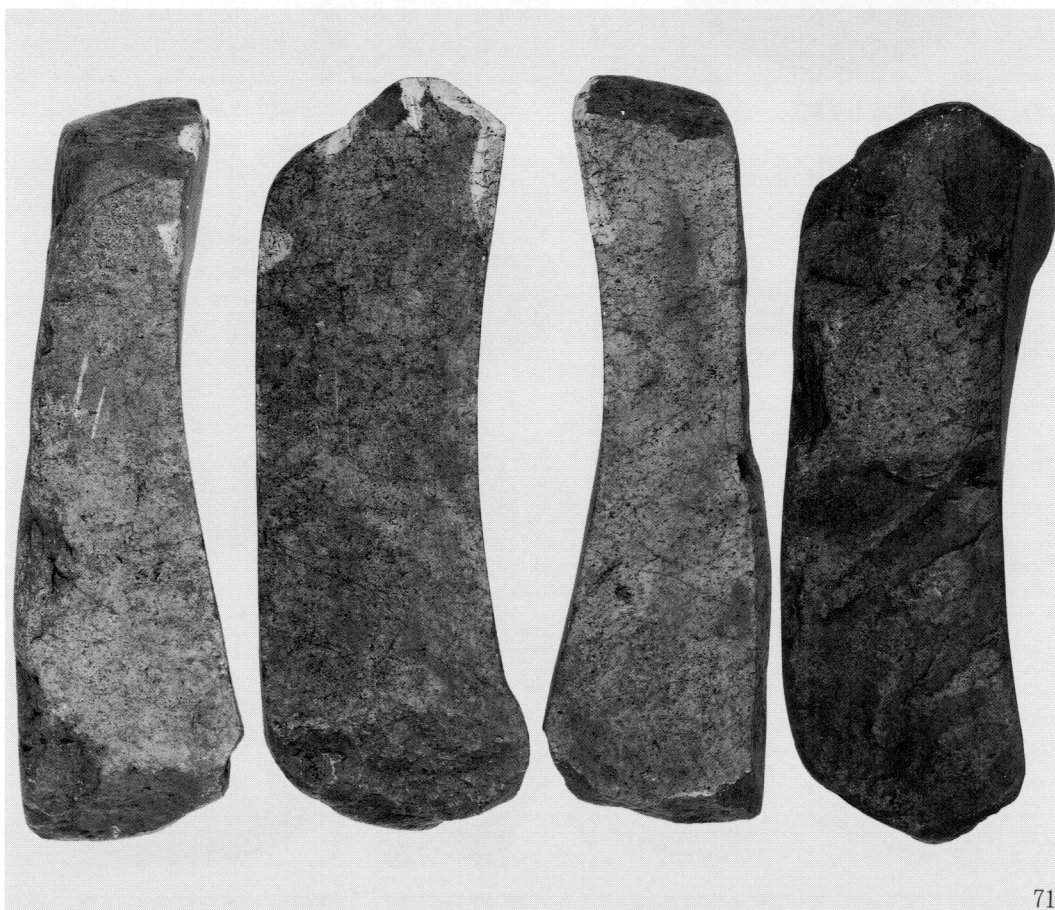


(2) 第4地点出土石器



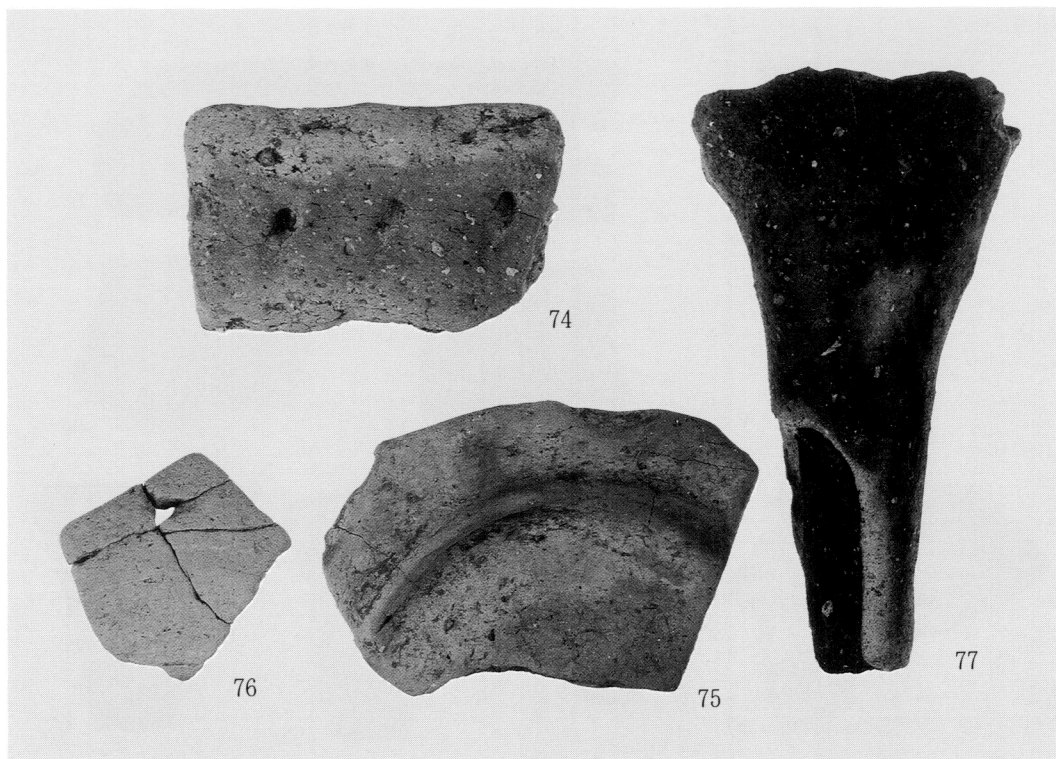
70

(1) 第4地点出土扁平片刃石斧

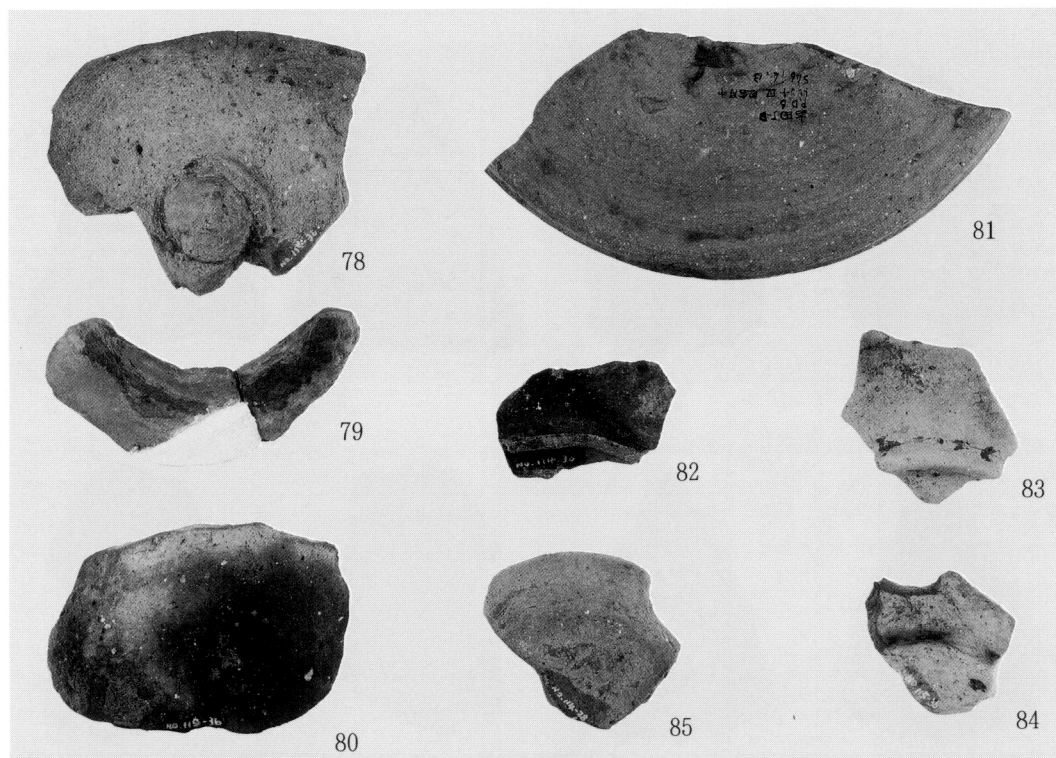


71

(2) 第4地点出土砥石

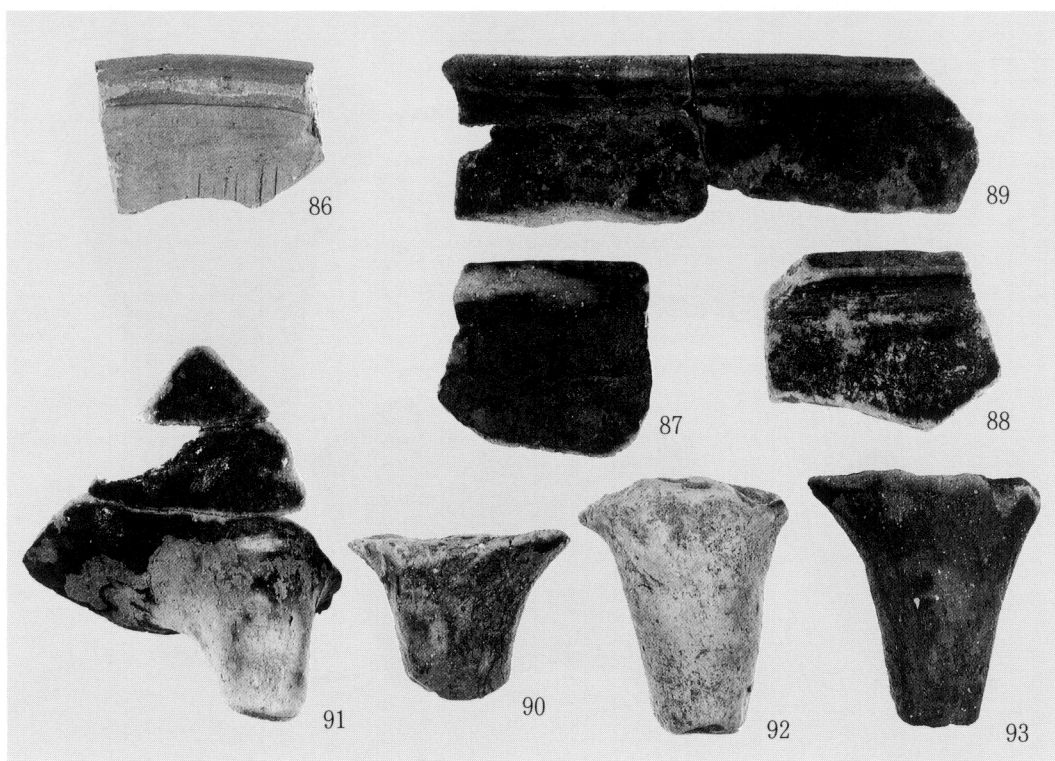


(1) 第5地点出土遺物

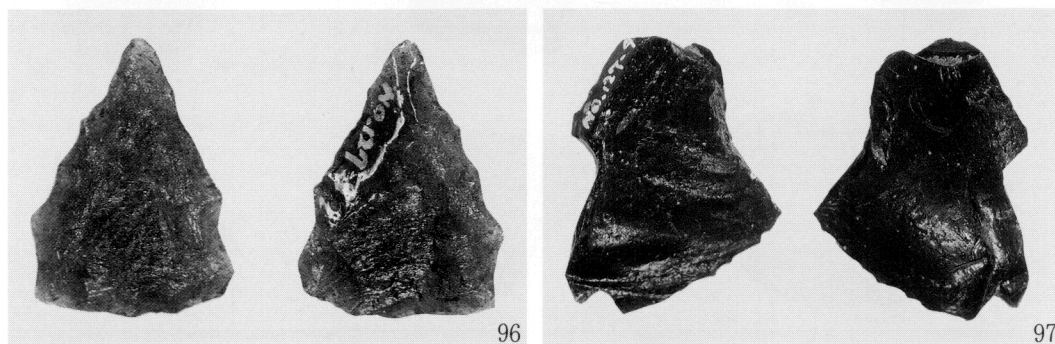
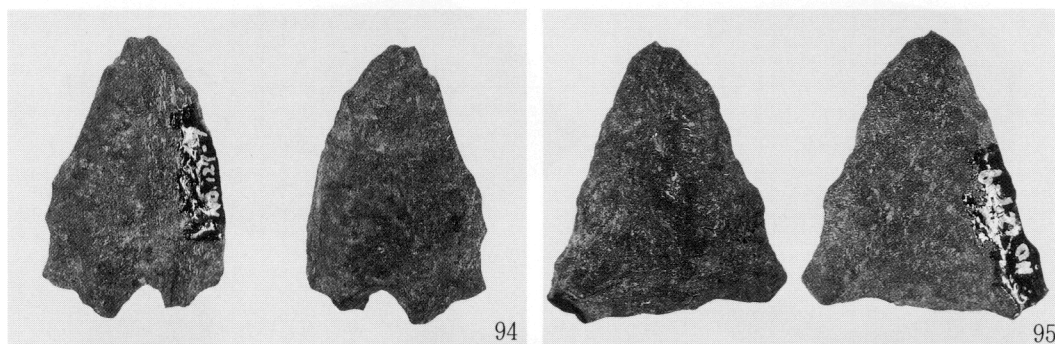


(2) 第6地点出土遺物

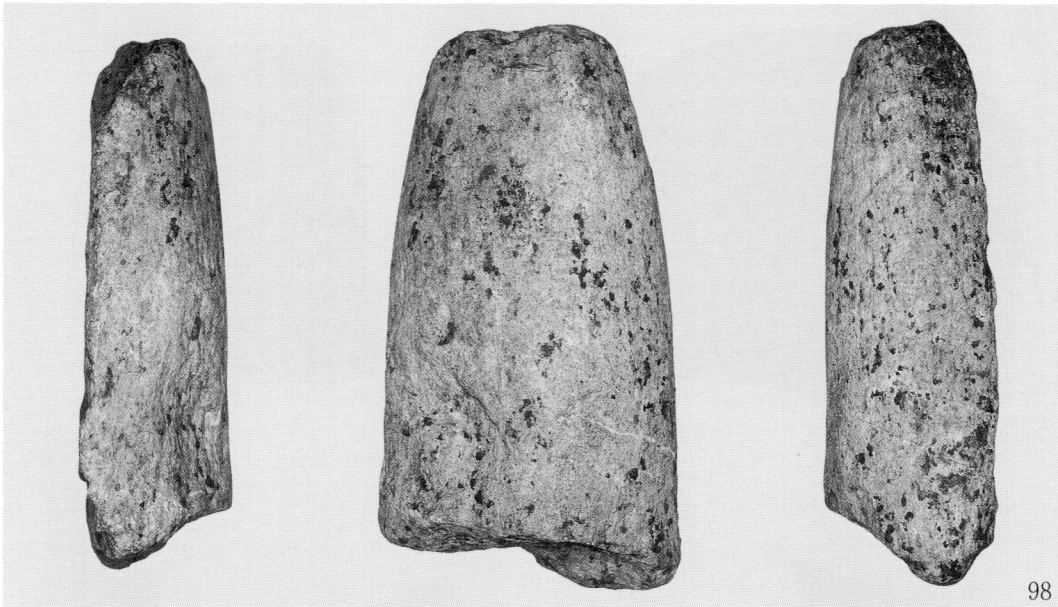
吉田遺跡第I地区D区の調査
(14)



(1) 第6地点出土遺物

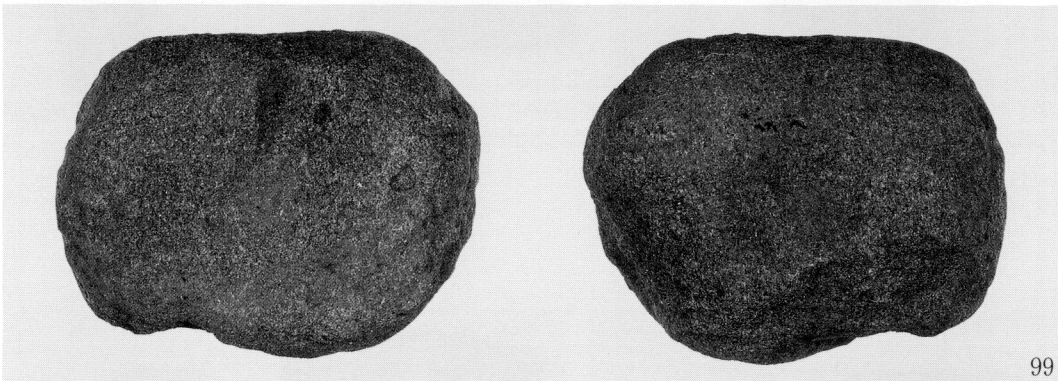


(2) 第6地点出土石器



98

(1) 第6地点出土石斧



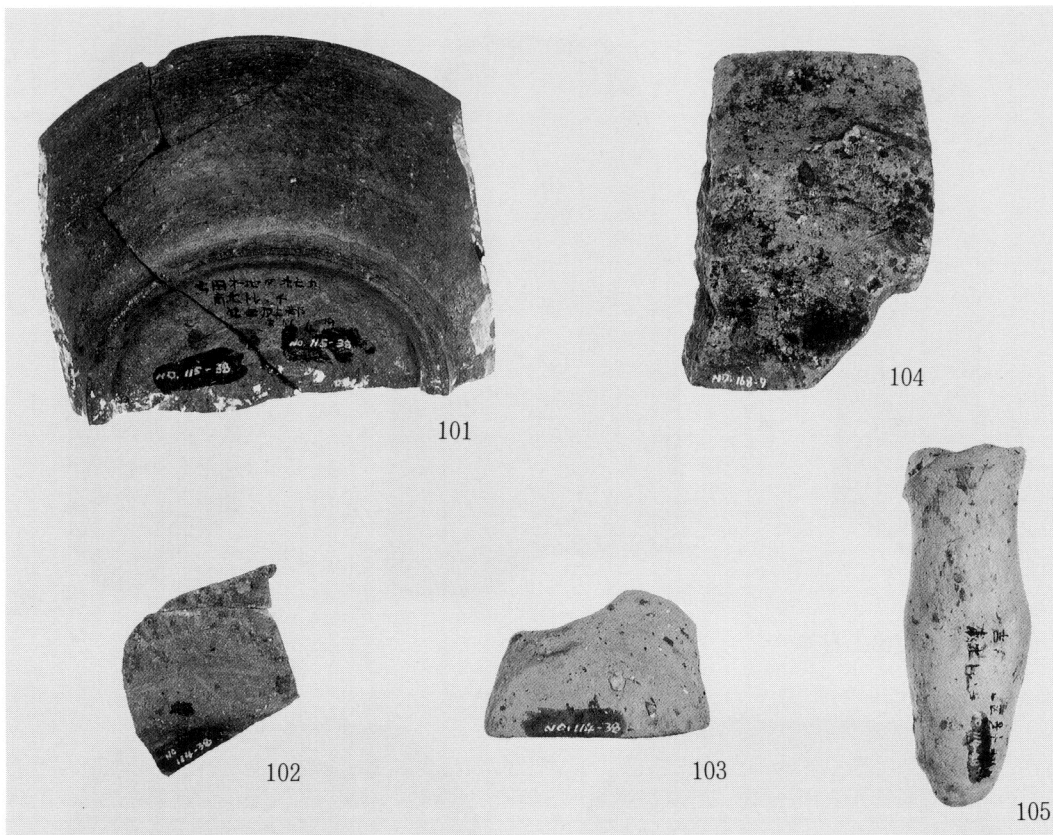
99

(2) 第6地点出土くぼみ石

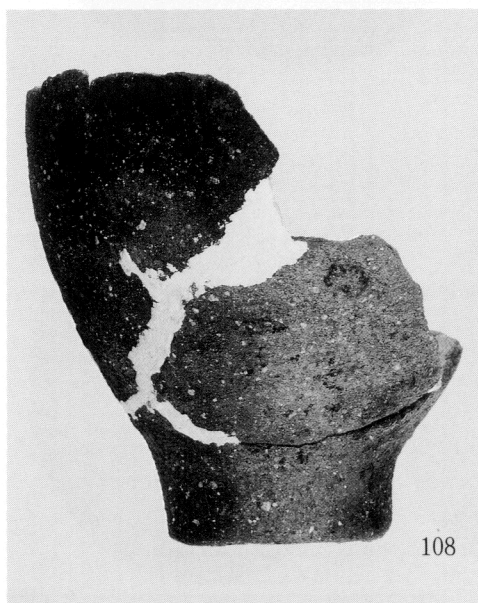


100

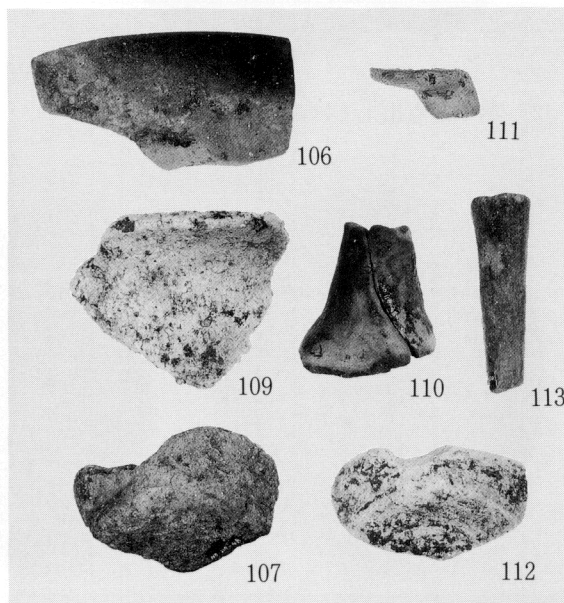
(3) 第6地点出土くぼみ石



(1) 第7地点出土遺物



(2) 出土地点不明弥生土器 (第5地点?)



(3) 出土地点不明遺物